
先輩といたいけな後輩

はなぺ*

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先輩といたいけな後輩

【Nコード】

N4437Y

【作者名】

はなぺ＊

【あらすじ】

「可愛いウサちゃん。あ、それともくまちゃん？リスちゃんかな」
「先輩、からかうのいいかげんにやめてください」 「夢乃、超可愛い。マジ天使！」 「先輩！ いいから帰ってください！」 ちょっとだまされやすい天然ちびっ子夢乃と、それをからかって遊ぶ、学校で人気者の先輩のお話。……だったけど、事情が変わった？

先輩といたいけな後輩／夢乃の場合／

……ちよきちよき。

よし！上手く切れた。くまちゃんの耳のバランスもなかなか上手くいったかも。

「夢乃ー」

糸はさつき用意したピンクのどと。

「かまってー、こっち向いてよ」

よし！……んー。うん。上手く針に糸も入った。あ、でも玉結びちよっとしっぱいしちゃった。なんで上手くできないのかなあ。

「夢乃ー。おーい」

まっ、玉結は中に入っちゃえば見えないし、大丈夫大丈夫。

「ひまだから騒いじゃうよー。いいの？」

よし！縫うぞー。

「あー、ひまーひまー。ひーま、ひまっ。ひまだぞー、ひまなんです。ひま」

「……」

「暇じゃなく、とってもなあー。あーあ、ひまだよねー、そうだよ

ね」

「……」

「あなたも私もみんなひま」

私は暇じゃないです。

「ねーねー」

「……」

「ねー姫？」

「……姫じゃないもん」

「ねー、可愛いウサちゃん」

「……」

「じゃあ、ネコちゃん？ ワンコかな？」

「ウサちゃん違うし、にゃんこでもわんこでもなし！」

「あつ、じゃあねー、可愛い妖精ちゃんかな。それとも、くまちゃん？」

しつこいなあ。

「ねー、俺のマイスイート」

「あー！ もうっ、先輩！ しつこいのです！ 私は今、作業中でっ」

私は、目の前で頬杖ついてニヤニヤしてる先輩に向かって叫んだ。

「あ、ふふ。夢乃がこっち向いた」

そう言って、先輩はきらきら微笑んだ。

あっ。

うっ……。ちょっとドキっとした。

顔だけはいいのだ、この方は。そう、顔だけは。

言ってる事とか行動とかは意味不明なのだけど。そんなお方にきらきら微笑まれたら、さすがの私も。

いやいや！ 頑張れ私！ 先輩のペースにのまれるわけにはいかない。

今日はあと2つはフェルトマスコット作りたいし、これ以上ジャマされちゃうと困っちゃうし。

私は手に持っていたピンクの刺繍糸を通した針を針山に刺して、くまちゃん形に切ったフェルトを机に置いた。

「先輩さま。早く自分のホームに帰ってくださいまし。可愛い後輩ちゃんが、カッコイイ自慢の部長の帰りを待ってますよ」

「え！ ウソ！ 俺の事カッコイイって？ 自慢の部長とか思ってるの夢乃！」

「センパイ！ 私は家庭科部です！ あなたは私の部長じゃなくて科学部の部長でしょ！ そういう意味で言ったんじゃないって」

「ねー、そんな事どうでもいいからさっ。ねーねー、どうなの？俺の事カッコイイって思ってたの？ 夢乃」

「はーい、はいはい、あんたが大将ですよ。かつこよさげすぎて、眩しくてキラキラしてて直視できないので、早くお家に帰ってください」

「やだな。照れ隠し？ もー、夢乃オレの天使！」

天使いただきました……。はは。大将早く帰ってください。

「先輩って……。頭の中お花畑ですよ。いっぱい可愛いキャラクターとかいそう。それで先輩その達と、あははうふふってダンスしてそうです」

「ダンスか、いいな」

「それで、そのゆるキャラ達と優雅にお茶会とかしちゃったりして」

「お茶会ね」

「それで和やかなムードのまま、超難しい化学式とか、実験とかの話になって」

「……？」

「そのままわけわからん、とにかく難しそうな会議とか始めそうです」

「はは、何それ」

「先輩って普段は超クールなんですよね？ 知的メガネで、ザ・白衣似合っちゃいます的な」

先輩は私の言葉を聞いてニヤッと笑った。

「そうだな。俺はクールかもな」

「なのに、ウサギちゃんとかくまちゃんとかにゃんことかわんことか言ってるし」

そういうの冗談でも言わなそうなタイプなのにな。

先輩のあだ名は確か、クール知的メガネ白衣な王子。ん？ 長い……？ アレ？ 確かこんなあだ名だった気がしたけどな。まいか。

たかばやしのお
高林維緒先輩。2年生。部活は科学部で部長。部活中は白衣を着ていて、いま目の前にいる先輩も白衣を着ている。

整ったお顔にキラリと知的メガネ。身長は180センチ以上で、成績も優秀というスーパーマン。そいえば、スポーツも得意だとか。先輩からも同級生からも後輩からも大人気で、ファンクラブも在るとかないとか。とにかくモテモテらしい。

先輩を校内で目撃した友達が、メガネにちょっとかかるくらいの

スーパーで超サラサラ黒髪な前髪を指でさつとすくう素振りがなんともセクシーでヤバかった！　って大騒ぎしてたな。セクシーって……。

でも、なにやらずっとムスっとした表情をしてて、やたらお堅い雰囲気を出してて、口も悪い？　なんとも近寄りがたい存在なんだろう。モテモテには違いないのに、なかなか先輩に愛の告白ができる勇者が出現しないらしく、先輩に彼女がいるって話は聞いた事がないって言ってた。

もったいないな。黙ってればイケメンなのに。まあ、変なこと言ってもイケメンだけど。とにかく、こんなところで油売ってないで、さっさと観念して、沢山いる先輩の事が好きでしようがない美女を彼女にして、楽しい時間を過ごせばいいのに。

私はそんな先輩に、ある事件をきっかけに、毎週水曜日、こうして絡まれるようになってしまった。とほほ。

しかも、ここで私に絡んでくる先輩は、ちっともクールでも知的でもないときた。

「先輩ってちょっと変わってます。てか天然ボケ？」

「はあ？　まー、夢乃には言われたくないけどな」

「それ、どういう意味ですか？」

「天然記念物に天然って言われても」

「私は天然じゃないですよ！　……確かに、みんなには天然キャラ

って言われますけど」

こんなに普通なのにどこが天然なのだろう？

「天然って言う方が天然なんですよきっと」

「お？ それって、バカって言った方がバカってやつのな？」

「そうそう！ それですよ、先輩わかってる」

「まっね」

お互い、ハハッと笑いあって、和やかなムードに……、じゃない！

「先輩、違うんです！ そんなお話をしたかったわけじゃなくてですね」

「そんなお話って……。そんな話とやらを始めたのは夢乃だし」

「違うんです、関係ないんです！ 先輩帰ってください！」

「アレま。なんととはっきりとおっしゃる」

突然、俺は傷ついた……と、下を向いてしまった先輩。

「せ、先輩。傷つけるつもりはなかったのです」

「しょぼーん」

「先輩ごめんなさい」

「ショボーン」

「先輩……！　うう、えっと、えっと」

「……夢乃？」

「はい！」

「傷ついたから責任取ってくれる？」

せ、責任って。

「ど、どうしたらいいですか？　出来る範囲でなら」

「じゃあ」

そう言っ勢いよく顔を上げた先輩。

そのお顔は、それはそれはニヤニヤと笑っていて。

「あ……」

「夢乃。俺、今日は傷心気味だから、部活終わるまでここに居るから」

うわー。めっちゃ嬉しそう。

そう表現するしかなさそうな素敵な笑顔で先輩はそうおっしゃいました。

やられた。

「先輩のバカ」

「夢乃のカバ」

「ムキー！ 私カバでもいいので自分の部屋に帰ってくださいよ」

「えー、夢乃はカバじゃなくて天使だし。カバより可愛いよー」

「自分で私のことカバって言ったじゃないですか先輩」

「えー、俺がそんなこと言うわけじゃないじゃん。夢乃ってヒドイよね、俺傷ついた……」

「ふんっ。もーその手には乗らんですよ」

「お、ちょっと学習した？ えらいねー賢くなったんだね夢乃」

おー、よしよしと私の頭をなでる先輩。

大きくて女の子の手よりもこつこつした感じの手の雰囲気になんとドキドキした。

……。

というか、どうしたらいいのコレ？ なんなのいったい。なんで先輩は私の頭をなでてるの。

先輩がいつもより近い気がして、しだいにドキドキが大きくなってきました。なんだコレ。

「よしよし。ん？ あれ、おとなしくなったね。こうされるの嬉しい

いの？」

先輩がニヤニヤしながら聞いてきた。

「違います。緊張してるんです！」

「可愛いねー。この小動物は」

先輩は私の頭をなで続けた。

よしよし、よしよし。

そう言って嬉しそうになで続ける先輩とは対照的に、みるみる顔が赤くなって縮こまる私。

「先輩……。もういいです。ここに居てもいいので、その手を」

「はは。ごめん。調子のった」

そう言って手を離してくれたものの、先輩の顔はニヤニヤでいっぱいだ。

「も、モテモテ先輩さまとは違ってですね、わ、私はこういうことにはあまり免疫がなくてですよ」

しどろもどろになりながら訴える私を見ながら先輩はますますニヤニヤ。

面白くない。

「夢乃って面白いよな」

「私は面白くないです。いたいけな後輩をいじめてはいけませんよ先輩」

「いじめてないよ。可愛がってるだけ」

「これはいじめなんです！ そうなんですよ先輩わかりましたか！」

「はいはい」

そう言ってヒラヒラ手を振る先輩。絶対わかってない。

「もー。先輩って暇なんですか？ なんで私のじゃまするんです？」

「だから面白いから」

ああだめだ。言葉で言ってもしょうがない。あきらめよう。
でも。

「もーいいです。私も仕返しします」

「何？」

そう言っってイスから立ち上がった私を見て、ちよっただけビツクリした顔をした先輩。

そのまま先輩の隣まで歩いて行く私。そしてまだ少し驚いた顔をして私を見上げている先輩を見下ろす。150センチない私が180センチ以上ある先輩をこんなに見下ろすことってあまりないかなあ、とか思いつつ作戦を実行する。

「よしよし、いーこいーこ」

「!？」

私はおもむろに先輩の頭をなではじめた。
仕返した。どうだまいったか。

「よしよし、よしよし、いーこいーこ」

「……えーと？ 夢乃、なんだろういったい」

「仕返しです。どうだまいったか！」

さっき思った事をそのまま言った。

ふふ。困ってしまっただろう先輩？ 私なんか、よしよし、いーこいーこされたら、クール男児の心のプライドが傷つくでしょ？

……いや、別に傷つけたかったわけじゃなくて、ちょっと困らせたかっただけだったんだけど。

……。

どうしよう。本当に傷つけちゃったら。

本当はちよつとだけ、本当にちよつとだけ、先輩の頭をなでなでしてみたいなあって興味があって。だって私だってされたんだし、いいよね？ ちよつとぐらい……。

先輩の超サラサラヘアーの感触を楽しもうと思ってたのに、もしかして傷つけちゃったかも？ という不安がぐるぐるしてきて、思わ

ず手を離してしまった。

「……夢乃？」

急に離したのでビックリしたのか、不安そうに見上げてくる先輩。

「あの……。傷ついちゃいましたか？」

「はい？」

「私なんかに、いーこいーこされて」

「は、はい？」

「えーと、別に先輩のプライドを傷つけるつもりはなかったんです！
ごめんなさい」

そう言って、ちょっと頭を下げる。

「え？　なんかいろいろ意味がわかんないんだけど？」

「だから、さっき頭なでられたから、仕返ししようと思って……。でも傷つけるつもりはなくて」

そう言う

「ははっ、仕返し！　マジで面白すぎる」

そう言って先輩はお腹を抱えて笑いだした。

「なんで笑うんですか！」

こっちは必死であやまったのに！

「はは！ヤバ、腹筋痛すぎる、はは、ははは！」

「先輩〜！」

そう言ってしばらく笑い続けた先輩。

「はー、落ち着いた……。ぐふっ、はは」

「せんぱい」

「あ、ごめんごめん。それにしても、天然もここまでくるとなんだから最強だよな」

「天然じゃないもん……」

ちよっと拗ねた感じに下を向くと、先輩が予想外に優しく話し出した。

「夢乃、俺、傷ついてないよ」

「本当ですか？」

「まあ、むしろ逆だな、うん」

逆ってなんだろう？

「逆って？」

「ん、お前さく、他の男にもそんな態度とるなよ？ 勘違いされるぞ」

「勘違いって？」

「だからさ……。天然記念物の小動物にはまだ早いさ……。駆け引きとか計算ないもんな」

最後の方はなんだかぼそ言ってて聞こえなかったけど。

「まっ、いいぞ」

「へ？」

「だから、どうぞ？」

「だから、何がですが」

「仕返しだろ？ どうぞ、俺傷つかないし、お好きなだけ」

そう言っで自分の頭を指差す先輩。

「いーこいーこ、してくれるんだろ」

ニコニコ笑う先輩。

「俺、誰かに頭なでられる趣味はなかったんだけど、案外いいもんだな。おい、早く」

「早くって」

「だからー、頭なでてよ」

そう言って右手をひっぱられ、強制的に先輩の頭の上に。

「はい、どうぞ」

「どうぞじゃないです！ 強制的にするもんじゃないです」

「なんで？ 仕返しでしょ？ どうぞ？」

上目遣いで言われて、なんだかドキッとする。
どうしちやっただろ私。

「い、嫌です」

「えー」

「もー！ 先輩のバカ！ むうう」

「ははっ、夢乃が怒った。何その顔」

膨らんでいた私のほっぺを先輩が押して、ぷくうくと空気が抜ける音がした。

「面白すぎるぞ、立花夢乃」

「先輩さっさと帰ってください！」

先輩といたいけな後輩〜夢乃の場合〜（後書き）

先輩といたいけな後輩く維緒の場合く

面倒くさい。

ナゼ俺が逃げないといけない。

俺は結構モテる。

1年までは、モテるのもそれなりに嬉しくて、それなりに付き合ったりもした。楽しい時期もあったが、女達の態度がだんだん面倒くさくなってきた。

2年になってからはわざわざ、来んなよ？　オーラを出して寄せ付けないようにしてたのに、ナゼか久々に俺を追いかけてくる女が現れた。

くそっ。

めんどい。

だいたいお前は俺の何を知ってる？　見た目がイイのがそんなにいいんかよ。

俺はお前のアクセサリーじゃねーんだぞ？

イライラしながら適当な教室に逃げ込んだ。

ガラッ！

勢いよく扉を開けると、1人女が居た。
突然俺が入って来てビックリしたのか、そのままの体制で固まってる。

「ちょっと追われてるんだ。隠れさせて」

「はい？」

女を無視して教室を見渡す。ここはどうやら被服室だ。

「おい、どっか隠れられそうな場所ない？」

「え！ えと、そうですね」

女はちよつと考えてから、きよろきよろと挙動不振に周りを見て、
あ！ と何かに気づいたように声を上げた。

「準備室なら」

そう言って立ち上がると、黒板の隣にある扉の前に立ち、ポケットから鍵を取り出して、一瞬迷ったようだったが扉の鍵を開けた。

「こ、この中なら……あの、家庭科準備室的な場所です。鍵ないと入れないので」

いかにもおそろおそろという感じ。不安そうにこっちを見つめながら言ってきた。

「あんがと、助かる」

そう言って準備室に入る。布とかの、こもったどくどくの匂いがある。

「あの、外から鍵かけますので……」

おっかなビックリという感じに俺に話しかけてくる。
ずいぶん見上げてるな。こいつ身長低いな。

「たのむ。変なのがくるかもしれないねーけど、適当に追い払ってくれる？ 居なくなったら鍵開けて？」

「はあ」

すごい複雑な顔をして、彼女は鍵を閉めていった。

確かに、いきなり知らないやつが部屋に入ってきて、隠れたいうんぬん言ってきたら困るよな。自分でしたことなのになんだか笑えてきた。

それにしてもあの表情はなかなか味わい深い感じだったな。

緑リボンだったから、1年か？ 1人で教室で何してたんかわからないけど、ジャマしたかな。悪いことしたな。

まーとにかく。コレでひとまず安心か。

俺はそのままずるずる床に座り込んだ。

その時だ。

被服室の扉がゆっくり開く音がした。

「あの一。すみません。ここに高林くん居ませんか？」

ちっ、しつけー。本当に来たのかよ。全部の教室のぞいてんじゃねーか？

「はい？ あ、高林くんて？」

「あ、ごめんなさい。身長が高くてメガネで白衣着てる、カッコイイ感じの……、知らない？」

「えーと……」

「あ、あなた1年生？ごめんね、さすがに1年生は高林くんのこと知らないか。高林くんって結構有名なんだけど」

あの女なに言ってるんだ？余計なこと言うなよな。

「あ、あの。知ってます！ 高林先輩の話」

お、オイ、知ってるのかよ！

「本当に？」

「はい、友達がカッコイイ先輩がいるって話してたの聞いたことあります。確か高林先輩って言ってたような」

「本当？ やっぱり彼、1年にも人気あるんだ」

ちょっと妬けちゃうな、とか言って笑ってるようだ。
お前……俺の何のつもりなんだよ。

「とりあえず、もし彼が来たり、見かけたりしたら彼女が呼んでたって言うってくれるかな？」

「は、はい！ もちろんです！」

「ありがとう」

そう言って、奴はガラガラと扉を閉めて出て行った。
誰が彼女だ。胸糞悪い。

それから1分くらい経ったくらいか。1年の彼女が準備室に近づいてくる気配がした。

「せ、先輩。あの、たぶんもう、大丈夫だと思うんですが、鍵開けますか？」

ちょっと声が震えてる。

「あー、うん。あんがと」

俺が立ち上がると、鍵をガチャッと開ける音がして扉が開いた。
扉の奥で、彼女がおそろおそろこつちをのぞいている。

「ありがとう、助かった」

そう言って、教室に戻ると、ウーンと背伸びをした。

「たく。何が彼女だあいつ。ストーカーの間違いだろが」

ウゼー。まったくもってウゼー。

俺を見かけると、とことんどこまでも追いかけてくる。本当にいい加減にして欲しい。

「彼女さんじゃないんですね……。あの、その、お疲れ様です」

そう言うのと、疲れたような笑顔を浮かべて、もともと彼女がいた机に戻った。

彼女は、髪は肩くらいまでの可愛い感じのボブをセンター分け。たぶん染めてないよな？　なんとなく茶色っぽい気がする髪。目はちよっとタレ目っぽい。スカートは短すぎず、長すぎず。

まあ、1年だもんな。そんな目立った感じでもないけど、地味すぎる感じでもない、普通だ。ただ、ちよっと身長は低そうだな。

「あ、君もお疲れ。てか、いきなりでごめんね。でも本当に助かった。ありがとう」

そう言うのと、さっきよりはいい顔で笑い返してくれた。

「いえいえ。お役にたてたようでよかったです」

そう言ってなにやら作業を始めた。

ピンクの糸がついた針に、星型のフェルトを持つと、ちくちく縫い始めた。よく見ると、黄色と水色と2色のフェルトを縫い合わせてる。

そういえばここは被服室だ。ということとは。

「君、1年だよな。家庭科部かなんか？」

「はい、家庭科部です」

そんな会話をしつつも、彼女の手は止まらない。

ちくちく器用に縫っていく。表情もさつきとは違ってなんだか楽しそうだ。

「器用だな」

「いえいえ！ そんなことないです！ 適当です」

一瞬俺を見て、ビックリしたような顔をしたが、また下を向いて作業に戻ってしまった。

なんだか面白そうだったので、彼女の前に座ってその作業の続きを見ることにした。俺が目の前に座って驚いたのか、彼女が作業を中断して俺を見てきた。

「あの」

「あ、なんか面白そうだなって思って。ちょっと見てってもいい？」

「へ……、あ、わかりました」

ちょっと顔が赤くなった。なんかいちいち反応が面白いな。

「コレ何作ってんの？」

「フェルトマスコットです。これ作るの好きなんです」

そう言うのと、なんだかニコニコしはじめた。

「フェルトを好きな形に切って、この刺繍糸で縫っていくんです。ただそれだけなんですけど」

彼女が指差した場所には色とりどりの刺繍糸とフェルトが沢山入った袋があった。なんとなく全体的にパステルカラーが多い気がする。

「いっぱいあるな」

「はは、ちょっと買いすぎてしまった」

先日セールだったもので、とちよつと恥ずかしそうに笑った。

「これ、今縫ってるやつはこの後どーすんの」

「あ、これは、これから綿を詰めて、ストラップにしようかなと思ってます」

彼女は全体の半分ちよいくらい縫い合わせると綿を詰めはじめた。なんか面白そうだな。

「なあ、俺もやっていい？」

「え！」

予想外の言葉だったのか彼女はまた固まってしまった。いちいち面白い顔するなこのこ。

「だめだよなやっぱ……」

「どうぞ！ぜひ、やってみてください」

そう言って作り中のマスコットを手渡してくれた彼女の顔は、本

当に嬉しそうなものだった。

なんだよ、さっき固まってたくせに。固まってる時の顔も面白いけど、やっぱり笑顔の方がいいな。可愛いな。

って、あれ、可愛い？

「先輩、なかなか上手ですよ」

自分で言い出したのに、ちょっとだけ上の空で綿を詰めていた俺に彼女はニコニコと笑いかけた。

ドキッ。

まただ。なんだこれ。

「綿、これくらいで大丈夫ですよ。あとは、もうちょっと縫い合わせて最後に微調整です！」

俺からフェルトを受け取るとまた縫いだした。

よく見てると、縫い方が特殊なのに気づいた。適当って言ってたのに、ちゃんとこった作りなんじゃないか？

ちまちま縫ってる姿がなんだか小動物のように思えてきた。なんだろ、ウサギか。リス？ハムスターかな……可愛いな。

はっ！ やべ、なに考えてんだ俺！ どうしたんだ！？

「出来たー」

俺がぐるぐる考えてるうちにどうやら完成したらしい。裏と表が黄色と水色のツートンカラーの可愛い感じの星のストラップ。

「お！ けっこういいな」

「先輩が手伝ってくれたおかげですね」

ろくに手伝ってないのにヨイショしてくれた。

「これストラップの紐はどうなってんだ？ 中から出てるけど」

「埋め込み式に致しました」

「埋め込み式ね、よくわからないけどいいんじゃない」

いつの間にかマスコットに、周りを縫った糸と同じ色の紐がついていて、ちゃんとストラップみたいになっていた。

「なあ、家庭科部って部員1人なの？」

「え」

「だって、君しか居ないし」

「あ、いや、居ますよちゃんと。大丈夫です！」

「今日はたまたま1人？」

「あ、いいえ。実は毎週水曜日だけは部員がそろわなくて、私1人になっちゃうんです」

でも、1人でもマスコット作ってれば楽しいので、1人でやります。と、またニコニコと笑った。よく笑うこだな。

「ふーん、そいえば名前はなんていうの？」

「え、名前？ ……た、立花夢乃です」

名前を聞かれると思わなかったのか、またビックリした顔をした。

「俺は、……まあ、もう知ってると思うけど、高林維緒、2年」

俺は自分の青いネクタイをヒラヒラさせながらそう言った。
うちの高校は学年ごとにリボンとネクタイの色が違う。

今年は、緑が1年、青が2年、赤が3年。

「先輩って本当にモテるんですね。さっきの方3年生ですよね」

「あ？ ああ」

そいや、俺はあの女に追われてここに来たんだっけか。すっかり忘れてた。

「たく、自分が好きでもない奴に追っかけられても嬉しくない」

「そうなんですか？」

「そーだよ」

「そんなもんですか」

「そんなもんだ」

へー、とか、ほーとか気のない返事をしながら、彼女はまた次の作品を作るつもりなのか、袋をがさごそしはじめた。

なんだこの反応。

「興味ないの？」

「何にですか」

「俺に」

「へ！ 俺に？」

今日見た中で1番ビックリした顔をした。

「教室いきなり入ってきて、ビックリしただろ？ なんで逃げてんだろか思わなかったわけ？ あの3年何だよとか」

「い、いや。逆に聞くのは良くないかと思って」

「何で」

「いや、だって……」

「だってって何だよ」

何でだ？　なんで興味ないんだ。なんで俺に興味を持ってくんな
いんだ。

「俺は興味ある」

「へ？」

「俺は夢乃に興味ある」

「はい？」

「なんか気になる」

「なんかって……」

女子にこんな反応されたの久々だ。

それに一緒にいて嫌な気分にならないのも。いや、むしろ面白い？

「先輩の顔、なんかニヤニヤしてますけど」

「あー。そうかも、ニヤニヤしてるかも」

「えーと、私、用事を思い出したので……」

帰ります、と、小さな声で言いながらおもむろに帰り支度をはじ
めた。

なんだこのこ、面白すぎる。

「何逃げようとしてんの？」

「え、そんなめっそうもないです、先輩から逃げようなんてこれっぽっちも思っていないですわ」

「ですわ、ってなんだよ」

「なんとなく舌がまわらなかったのです」

「ねー、夢乃って面白いね」

「面白くないです」

やばい、面白い。顔がニヤニヤするのが止まらない。まいったな。

「そ、それに！ 逃げてたのは先輩の方です！ 私じゃないので」

お？ 何？ びくびくしてると思ったらいきなり俺に意見してきた。

「よ、用事がないのでしたら、お、お帰りくださいです」

ぷいっと怒って横を向いた。

あ……なんだろうこれ。可愛い。

「……。ウサギ、いやリス、ハムスター」

「はい？」

「んー、なんだろう。ワンコかな？それとも天使？」

「はい？」

彼女の目がみるみる大きく見開いていく。

「先輩？　どしたんです」

「いや、夢乃って面白いけど、可愛いな」

そう言って、夢乃に笑いかけた。

たぶん、今それはそれはいい笑顔してるよ俺。俺を好きとか言ってくる女達なら確実に落ちただろう。その笑顔を向けたら夢乃はどくなるんだ？

夢乃はいきなり後ろを向いてしまった。そして。

「あの……先輩」

「ん？」

「帰ってください」

「は？」

「だから私をからかうくらいなら、どうぞお帰りください」

私、まだマスコット作りたいので、とかなんとか言ってる。

「……おい、用事があって帰るんじゃないのか？」

俺は後ろ向きの夢乃に近づく。

「用事は、あ、明日でも大丈夫なので、い、いいのです！ 気にしないでください」

そう言って、夢乃は俺から少し離れる。

「なー。なんでこっち向いてくれないの？ 人と話す時は目を見て話せよ」

近づく。

「もうお話は終わりなので、終了です。ほたるのひかりです。閉店ガラガラです！」

離れる。

「ははっ！ やっぱり面白い夢乃」

俺はめいっぱい近づいて、ガツシリ肩を掴み、夢乃をこっちに向かせる。

こっちを向いた夢乃は顔が真っ赤だ。

「こんにちは、茹でダコさん」

「タコさんじゃないです」

「可愛い」

「か、からかわないでください！」

ヤバイ、ハマッタ。

「夢乃マジ天使」

「はい？」

「夢乃可愛い、面白い」

「先輩……、いいかげんに」

「夢乃」

「先輩、怒りますよ」

「怒ったらどうなるの？」

「ん……そうですね。2チャンに、とんだ先輩がいるって書き込んでさらすとか？」

「え！ 夢乃そんなことすんの！ マジ悪魔じゃん」

さいてーだ、さいてーだ。と嘆くと、泣きそうに謝ってきた。

「先輩ごめんなさい！ てか、2チャンとか見たことないし」

「見たことないのにそんなこと言ったの？」

「いやー、2チャンにさらすぞ！ って言うてみんなの反応が面白くて」

あははと笑う夢乃。

「夢乃って、自覚なしだからたちわりー」

変なやつ。でも面白いな。

「先輩が変なこと言うから悪いんです」

「悪いのは夢乃」

「なんで私が悪いのですか」

「せんせー、立花夢乃さんがイジメルー」

「いじめられてんのは私です先輩！」

逃げこんだ教室で会っただけの女の子。

「夢乃。可愛い」

「も、だから、からかうのはおよしなさいです！」

「はは、変な言い方」

「先輩！ 私が悪かったです！ 謝りますから帰ってください！」

「やーだ」

「もー！」

この出会いが、どんな方向に行くのか。実に興味深い。

俺は思わずニヤッと笑った。

「立花夢乃、マジ面白い、可愛い」

「先輩！ いいから帰ってくださいー！」

〵出会い編（完）〵

先輩といたいけな後輩く維緒の場合く（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます！

2人の未来は明るいです……？

「先輩は魔王様？」

くるくる、くるくる。

私の隣で、私の髪の毛を指に絡ませていじり続ける人がいる。

「先輩」

「んー」

「何が楽しいのですか」

「あー？」

「だから、私の髪の毛くるくるして、何が楽しいのでしょうか？」

「だって、夢乃かまってくれないじゃん」

つまんなーいと唇をとがらせ拗ねた顔をする。

あなたは何歳児ですか！

「それにジャマです！ あっち行ってください」

針とか持ってるし、あまり近づいてほしくない。危ないし。

そう言って、いつも先輩がいる私の前の席を指差す。とたんに、えーと批判の声が。

「だって、隣に居ないと髪の毛いじりづらいし？」

「いじらなくてもいいと思います隊長」

「なー、俺、夢乃のそばにいたいんだよ」

「……！ め、迷惑でございます！」

あーもー。

むだにカッコイイ王子様。

そんな先輩にこんな近くで、そ……そばにいたいなんて言われたら。

「夢乃ちゃん茹ダコ？」

「タコさんじゃないです」

ははっ、と笑う先輩。

ああ、もう、なんだかこれいつものやり取りになりつつあるな。

「夢乃ってすぐ顔が赤くなっちゃうね。なんでだろ」

「もともと赤いんです。ほっといってください」

「ウソだ。夢乃の肌って白くてキレイだよね」

「は……、はい？」

「んー、食べちゃいたい？」

「……先輩」

「あ、はは、ごめん、調子のった」

そう言って、ヒラヒラ手を振りながら、先輩はいつもいる私の前の席に戻っていった。

「これ以上遊ぶと、夢乃が赤鬼さんになっちゃいそうだしね」

そんなこと言いながらイスに座ると、頬杖をついてニヤニヤとこちを向いた。

ああ、まったく。

「先輩、こんなところで油売ってないで、部活に行ったらどうです」

「あー、部は俺が居なくても大丈夫なんだわ」

優秀な部員がわんさかいるしなく、とか言ってる。

「でも部長ですよね？」

「まあ、副部がいるし」

問題ないんじゃないね、あいつ俺と違ってしっかりしてるし、とか言ってる。部長、あなたそんなにいいんですか？ 副部長さんかわいそう……。

「じゃ、学生らしく勉強とか」

「は、勉強？」

「そうです勉強」

「俺さ、わりと頭いいんだわ」

だから勉強しねーし、とかなんとか言ってる。おいおい。そんなノリでいいのか。

「じゃ……、そんなにイケメンでおモテになるんだから、デートでもしたらいいんじゃないですか？」

「は？ デート」

「そうです、デートです。好きなだけ美女をはべらせてですね」

「好きなだけって……」

「先輩とデートしたい女の子がこの学校にはいっぱいいると思います」

学校以外にもいるかも。

「……ふーん。夢乃は俺が知らない女とデートしてもいいんだ？」

「いや、むしろした方がいいと思います。うん、絶対」

先輩はカッコイイし、きっと美少女はべらせてたら絵になりますねー。ふふふ。

とか言いながら、なんとなく想像して、頭の周りに花を咲かせてたら、突然、目の前からただらなぬオーラを感じて急に背中が寒く

なった。

春から真冬へって感じに。

おそろおそろ先輩の方を見る。

「へー、ほー、ふーん……」

そう言うなり、頬杖をつきながら凄い眼力で私を見てくる先輩。
いや、にらまれてる？ 顔に青筋が立ってる気がする。

「言うねー、夢乃さん」

「あ、いえ、どうも……」

そう言うのと、先輩は、ちょっと下を向いて、はくとため息をついた。

「俺はさ」

「はい」

「自分が好きでもない奴とデートしてやれるほど暇じゃねーし、お人好しじゃねーんだわ」

「はあ」

「だからさ、好きでもない奴と出かけても疲れるだけだろ」

「ほお」

「時間ももつたいない」

「へえ」

「おい、わかってんのか？」

「はあ……」

こいつ……。とか言いながら先輩は頭を抱えてしまった。

「先輩？」

「もーいい。夢乃のバカ」

「え！ ええ、あ、ごめんなさい……。せ、先輩？」

「もーいい、バカ、夢乃のバカ。人でなし」

「先輩ごめんなさい！ あ、あの、……機嫌直してください？」

やだー。夢乃のバカバカー、と言い続ける先輩に、どうしたらいいのかわからずオロオロしてしまう私。

「先輩。どうしたら機嫌直してくれますー！ 先輩」

今までも、傷ついたー！ とか言って不機嫌っぽくなることはあったけど、こんなにしつこく言い続けるのは初めてで。どうしたものと、こっちは半泣きだ。

「先輩、ごめんなさい。あの、えっと、えっと」

「……じゃあ。責任とってくれる？」

そう言って頭を抱えたまま、先輩はちよつとだけこっちを見た。

「はい！ もちろん！」

めちやくちはつきり返事をしてしまい、ちよつと後悔した。
だって、ちよこつとだけこっちを見ていた先輩の顔がみるみるうちに、いつものニヤニヤ顔になっていったから。

「言っただけ夢乃」

「はい……」

また、やられた。

「約束だぞ」

そう言っ、頭を抱えるのをやめてこっちを見た先輩は、もうすっかりいつものニヤニヤ先輩。いや、なんか、いつもよりちよつとブラッくなオーラ多め？

王子様というより魔王様という感じ。

「じゃー、夢乃、デートすんぞ」

「はい？」

魔王さまは素敵な笑顔でとんでもないこと言いはじめましたよ！

「責任とんだろ？ てか、夢乃が言いだしっぺだし。デートしろって」

「イヤイヤイヤ！ 私としろって言ったわけじゃなくて」

「うるせっ。じゃ、行くぞ！ 支度しろよ」

「はい？ 何で何で？」

「だから、今からデートすんだよ、おわかり？」

「わかりません！ 知りません！」

「おいおい」

そう言って立ち上がると、私の方に歩いてくる魔王様。

ひいー。なんか怖い。どうしよう。逃げたい。でも逃げられない。私があわわしてるのとは対照的に、スタスタと優雅に近づいてくる魔王様。

私の隣までくると、しゃがんで私に跪く感じになる。そして、なぜか私の右手をとって自分の口元付近に近づけた。

「ひいっ」

思わず声が上ずった私を見て、目の前の魔王様は、それはそれはキレイにニヤリと笑いました。

「責任とつてよ夢乃姫？」

きゃーー！

この魔王ー！ 悪魔ー！ 妖怪！ ええと、あー、もうよくわか

らない！

とにかく、誰か助けてー！

〈後輩天使とお買い物〉

「おい、ここって」

「楽器屋さんですけど」

「まあ、さすがにソレはわかるけど」

「すみません、付き合わせてしまつて……」

夢乃は俺を見上げながら、申し訳なさそうにそう言った。

部活中の夢乃を、なんだかんだで無理やりデートと言って連れ出した俺。あま、散々嫌がられたけど、だんだんあきらめたのかおとなしくなった。

どこか行きたいところはないか？ と聞いたところ、買い物に行きたいと言ったので、とりあえず夢乃についていたら、そこは楽器屋だった。てっきり手芸屋とかに行くと thought たんだけど。

「手芸屋に行くんかと思った」

「えへへ、セールでだいぶ蓄えたので、手芸用品はしばらく大丈夫そうです！」

と、ニコニコ答える。

「ふーん。で、楽器屋で何買うの」

「そそ、手芸品よりこっちの方が切羽詰って……」

ちよつと暗い雰囲気になりながらそう言った。

「何暗くなってるの」

「あ…いや、ははは」

私ってまぬけなんですよね……、一生懸命やったのになあ、とかぶつぶつ言ってる。なんだろう。

「とりあえず、ちよつと見ていいですか？」

「ああ、いいよ」

歩き出すと、楽譜とかがいっぱいあるコーナーが見えてきた。

「夢乃ってピアノでも習ってるの？」

「え？　ピアノですか」

「あ、なんとなく、イメージ？」

「ピアノは幼稚園から小4くらいまで習ってましたけど、悲しいほど弾けません……。もともと、お兄達が習ってて、私もやりたくなっちゃって始めたんですけど」

才能がなさすぎたのでしょう、と苦笑い。

幼稚園から小4ってことは、ぼちぼち長い間習ってたってことだよな。悲しいほど弾けないって……そんなにへたくそだったのか？

それより。

「夢乃って、にーちゃんがいの?」

「はい、3人きょうだいです」

「へー、末っ子か。俺は妹がいるよ」

「え! お兄ちゃんなんですか!」

「そうだけどなにか?」

「いやあ、そうなんですか、ふーん」

そんなこと言いながら、夢乃はなんだかちよつとニコニコしてる。

「で、なに見んの? 楽譜とか?」

「楽譜もちよつと見たいけど、……あれ? どこかな」

夢乃はちよつと落ち着かない感じに店内をきよろきよろ見てる。

「このお店、最近できたばっかで、場所とかまだよくわからなくて……、あ、こっちな?」

ちよつと早足で壁際の方に行くと、あつた! と嬉しそうに言った。

「これです先輩」

「え、これって」

その場所は、意外な事にギターの弦のコーナー。

「夢乃、ギターの弦探してたの？」

「そうです」

「は！ マジ？ なに、ギター弾くの？」

「はい……、相当下手ですけど」

えへへと夢乃が笑う。

夢乃がギター弾いてる姿……。うーん想像しづらい。

「なんか、マジで意外なんだけど……」

「意外ですか？」

「うん。意外……。てか何持ってんの？ アコギとか？」

「いや、エレキです」

「おまっ、エレキ弾くの？」

「はい。えへへ」

これは本当に予想外だ。エレキギター弾いてる夢乃か……。まあ、悪くはないけど。

「実は、部活も軽音部と家庭科部どっちに入るか迷ったんですけど、部長が、あ、もう引退しちゃった部長なんですけど。部長がすごい人で。部長に惚れたというか……中学も家庭科部だったし、やっぱり家庭科部の方がいいかなって思ってた」

そう言ってニコニコ笑った。

「マジかよ。……なんか夢乃のイメージ変わったかも」

「そうですか？」

被服室で1人フェルトマスケット作ってる見た目も普通の女の子が、エレキギター弾くこだったとは。流石にその発想はなかったな。

「それで……。実は、先日がんばって初めて1人でギターの弦張り替えたんです。なのになのに……」

ここで、はーっとため息。

「上手く替えられて嬉しくてルンルン弾いたあと、弦をゆるめておいたんですけど。次の日チューニングしてたらペグ間違えて、4弦が切れちゃって。本当は6弦チューニングしてたつもりだったのに、実は4弦のペグを巻き巻きしてて、引っ張りすぎて切れました」

ううう、と泣きそうな夢乃。

「せっかく替えたのに1日で切れちゃうなんて、もう、超ショックで。上手に張り替えられて嬉しかったのに。しかも4弦とか中途半端な場所が切れちゃったから、もう私の技術じゃなんも弾けないで

すし……」

言いながらちょっと絶望的な顔をした。
はあ、なんかまぬけだな。

「夢乃って……。天然な上にちょっとまぬけだよな」

「そうなんです、まぬけなんです」

「否定しないのな？」

「だって、まぬけですよ……。ふがないといえますか
はー。とまたため息。

よっぽど悲しい出来事だったらしい。

おいおい、そんな暗い顔してんなよな。

「ま、張り替えればいいんじゃない弦」

「そうですね」

「次から気をつければいいことだし」

「そうですね」

「4弦以外は大丈夫だったんだろ？」

「そうです」

「だったらいいじゃん、4弦さえ替えればまたすぐ弾けるし」

「はい」

「誰だって失敗くらいするもんだ、元気出せよ」

「はい！」

夢乃はそう言ってニコニコ笑った。
そうそう、笑ってる方が可愛いぞ。

「先輩が優しい！」

「俺はいつでも優しいだろ」

「おかしいなあ、先輩が天使に見える」

「普段は何に見えてんだよ？」

「そりゃ魔王様でしょ」

魔王様だと？

眉間にしわを寄せると、ヤバイと思ったのか、夢乃が口元を押さえて固まった。

「へー、夢乃って俺のことそんな風に思ってるの」

「ち、違いますよ！ 美形な王子様だと思ってます！」

「ふーん、それで？ 何で魔王様なの、夢乃姫？」

「え、いいえ、そんな……」

「ねえ、夢乃ちゃん、教えてよ」

そう言って夢乃にじりじり迫っていく。大きく見下ろす俺と、大きく見上げる夢乃。

本当に身長差があるよな。

夢乃のやつ、まるで蛇に睨まれた蛙だな。

「いや……、あの。あつ、わっ私、弦、買ってきますので！」

「ちょ！」

夢乃はエレキ用の弦を1袋手にとって、凄い速さで走って行ってしまった。

「あいつ、逃げ足はえ〜」

はは。なんか笑える。

それにしても魔王様とはね〜。

俺はその場でふー、とため息を吐いた。

でも、意外だったな。夢乃がギターとか。人は見かけによらないな。

軽音部と家庭科部で迷ってたのか。残念なことに夢乃が軽音部のってあまり想像つかないな。やっぱり夢乃は被服室で楽しそうに

フェルトマスコット作ってる方が似合ってる気がする。

いや、でもおかしいな。最近は楽しそうに作業してるとこあまり見かけない気がする。俺が始めて被服室行った日ぐらいか？何でだ。あ、そうか。俺か。俺がジャマしてるからか。

ま、そうだよな。ジャマしに行ってるようなもんだし。でも、顔真っ赤にして恥ずかしがってる夢乃って可愛いんだよな。困って固まってる顔も面白くて好きだけど。

って何なんだろうこれ。俺のこの行動って。

あ、ああ。そうか。

面白いオモチャを手に入れてワクワクしてる感じか。

ニヤリ。

なんか夢乃のこと考えてるとニヤニヤしてくんだよな。あーなんか、1人で笑ってて、俺って変態っぽい？ま、いつか。別に面白ければ。

そんなこと考えながら、場所を移動してると、ちょっと離れた場所にあるレジで夢乃が会計をしているのが見えた。心なしか、落ち着かない感じで、おまけに顔がちよっと赤い。

そんな夢乃を見て、レジの男がにこやかに対応していた。

って、おい夢乃。レジにいいのは野郎だぞ。そんな顔すんなよ。そんな顔していいのは俺にだけだぞくそっ。イライラする。あいつ何考えてんだ。

早歩きで、夢乃の方に近づいていった。

「あいつにはお仕置が必要だな。たくっ。

ニヤ。

お仕置きか。

さてさて、何をしてやろうか。

〈後輩天使とお買い物〉（後書き）

踊らされてるのはたしてどっち？

＊ギターの弦は1本だけ替えるより、1度に全とっかえした方がいいようです。

夢乃ちゃん、もう1度、6弦全部の張替えにレッツトライ？

「先輩魔王様とお仕置き」

「先輩？」

「うん？」

「お仕置きって……、言っていましたけど。場所、ここですか？」

「うん、ここだよ」

さっき楽器屋さんで会計を済ましたら、なぜか猛烈に不機嫌な先輩がやってきて、お仕置きが必要だね？ とか言われて、ずるずる強引に引っ張られて、連れてこられたのがここ。

カラオケ屋さん。

そのまま、受付を済まして、またお部屋までずるずる引っ張られた。

えと、217号室？ですね。

飲み放題にしたようなので、荷物を置いてから飲み物をもらいに2人でドリンクバーへ向かった。

「先輩、歌うんですよね？」

「カラオケで他に何すんの？」

「いや、別に……」

ん？ それとも何かしたいことあんの？ と、ニヤニヤ耳元でさ
さやかれてしまった。

ふあっ！ 顔近い近い！

「先輩！ ヤダ、離れてください」

「はは、夢乃、顔真っ赤。 何？ 夢乃って耳弱いのか？」

はあー？ 何言ってるんですかねこの王子様は！

「もう！ 違います！ そうじゃなくて……。だって、お仕置きと
か言ったから。なんか怖いことになるかと思って」

「ふーん、具体的に？」

「え……」

「か弱いウサちゃんは何を期待しちゃったのかな？」

ニヤニヤ。

先輩が凄い顔してる。何を考えたらあんな表情になるんだろ……。

「だから、んー、たとえばですよ。バッテリーセンターで、ホー
ムラン取るまで帰らせんぞー！ とか。ゲームセンターであの1番
大きなぬいぐるみ取らないと許さんぞー！ とか……」

「は？」

「あ、それじゃ、んー。なんだろ……」

私が悩みだすと、そうだよな、お前はそうゆうやつだよ、とか言
って先輩がため息をついた。しまいにはなんか残念そうな顔して、
お前には色気がたりない……と言われた。なにそれ。

「ま、天然記念物だし、小動物だしな」

「先輩……」

私が喋ろうとしたら、まーまー。それよかさつさと飲み物選べよ
と、頭をぽんぽんされた。

んー。なんか面白くない。

てかですよ、お仕置きになんで色気が必要なの？　というか、む
しろ私は何で先輩にお仕置きされなきゃいけないの？　悪いことし
てないよね？

「俺カルピス」

そんな納得いかない私を無視して、先輩はちゃっかりジュースも
らってるし。ふんっ。

「夢乃は、どれよ」

「……。んー、私はですねー」

まー。よくわからないけど、カラオケ好きだし。せっかく来たん
だから楽しもう。飲み物も飲み放題だし。

「もちろんコーヒーでしょ！」

そう言って、ホットのコーヒーをコップいっぱいになみなみ注いだ。

「うふふ、コーヒー飲み放題！　じゃあ、お部屋に戻りましょう」

「え？　もういいの」

「はい」

「え、ちょっと」

「へ？　なんですか」

「夢乃って、コーヒーブラックで飲むの？」

「そですけど」

ブラックコーヒー大好きなんです！　と言うと、しばらく先輩が私を見て固まった。どしたんだろ？

「夢乃は、……斜め上を行くな」

そう言って、行くぞと歩きだした。

「斜め上ってなんです？」

先輩の隣に並んで歩きながら聞いてみた。

「夢乃は、コーヒーには砂糖めちやくちゃ入れて、ミルクもたっぷ

りってイメージだったんだよ」

「え？　なぜ」

「んー、何でだろうな」

そんな会話をしてたらお部屋についたので、先輩がドアを開けてくれた。こういうところはちょっと優しいな。

「奥座って」

「はい」

2人で使うにはけっこう広いお部屋だった。

大きめのテーブルに、備え付けの長いソファー。

たぶん、ここのカラオケ屋さんは全体的にお部屋が広い作りなのかな？

「マイク取りますね」

「あ、俺が取るよ」

カラオケのモニターの隣に2本置いてあったマイクと、曲を選ぶタッチパネル式の機械を先輩が取ってくれた。

「ありがとうございます」

「おう。じゃ、歌いますか」

私は奥に進んで、ソファーに座った。

先輩は私の隣に座って、機械をタッチして曲を探し始めた。

「先輩、何時間にしたんですか？」

「あ？ 2時間」

「了解です」

曲選ぶ機械も2台あったので、私も1台手にとって探しはじめた。
なに歌おう。

ん？

選んでいるとなぜか私の方に先輩が必要以上に寄ってきた。

「先輩、寄りすぎなんですけど……」

そう言うと、よけいに寄ってきて、先輩と私の体が触れ合った。

「ちょ！ ……先輩」

「何？」

先輩を見ると、やっぱり……。いつものニヤニヤ顔だ。もー。
私がちよつとずれると、また先輩が寄ってきた。

「あー。ソファー広いんですから、あまりこっちにこなくても」

「あ？ 別に俺がどこにいてもいいでしょ？」

そう言ってもっとこっちに寄ってきた。

あー！ もー、これじゃ先輩に潰される。

私は限界まで壁の方に移動した。よし、コレでもう大丈夫！ と思っただけど、それがいけなかった。

あっという間に、こっちに寄ってきた先輩と壁に挟まれてしまった。

「せ……、センパイ」

「何？」

先輩と私がぎゅーぎゅーにくっついてる。
何ですかこの状況って。

「センパイ、やだあ、やめてください」

「えー、何で？」

「何でって」

だって。なんだか恥ずかしいですし。こ……、こんな近くに、せ、先輩が。わわ。どうしよう。それに、なんか先輩からいい香りがする。なんだろう、この香りドキドキする。

「先輩……」

「はは、夢乃、顔真っ赤」

そのまま、やたら密着した状態で先輩が顔を寄せてきた。

「可愛い」

「いっ！」

耳元でささやかれて、私は言葉にならない悲鳴を上げた。

「夢乃、可愛い」

先輩の低くてカッコイイ声が耳に残る。先輩の声ってちよつとカッコイイんだよなあ。

じゃなくて！

「先輩やめて」

「え？　なんだって、夢乃」

そう言いながら、さっきよりもっと顔が近づいてきた。これ以上きたら、先輩の唇が、……触れちゃう。

「せんぱい、やめ……」

「え？　何？　はっきり言ってよ」

「や……」

耳元や顔に先輩の息がかかっている。息がかかる度に心臓がドキド

キする。

なにこれ、どうしよう。何？ 何なの？ いったいどうしたらいいの！

あーもー！ 誰か助けてー！

「はい、お仕置き終了」

へ？

そう言っつて、先輩は離れていった。

「おい、夢乃、何してんの？ 壁と友達にでもなりたいのか」

「ふえ？」

力なく、声の方を向くと、先輩は最初に座ってた位置まで戻っていた。

「おい、時間もったいないぞ。さっさと歌え」

そう言う先輩はいつものニヤニヤ。

「……せ！ 先輩の、バカ！ バカバカバカバカー！」

〈先輩魔王様の暴走〉

「夢乃さ？」

「はい」

「俺に彼女できたって聞いて、夢乃は傷ついた？」

「な、なんで、私が傷つくんですか？　む、むしろ、本当だったら、おめでとですよ」

「ほー」

「な、なんですか」

「マジでそー思ってたの？」

「へ？　は、はい」

ふーん。

「で、俺の彼女ってやつは、めちゃくちゃ美人なんだってな？」

「は、はい。そう聞きましたけど」

「3年生だって？」

「はい」

「で、俺の好みはめっちゃ美人な奴だから、その女はドンピシヤだった？」

「はい……、そう聞きました」

「で、極めつけが、俺から告白したって？」

「はい、そ、そう聞きました……」

おそろおそろ見上げながらそう言ってくる夢乃。その姿は、まさに小動物って感じた。子リスか？それともウサギ……。

今まさに大型動物に捕食されそうで、ぶるぶる震えてるやつみたいだ。

さつき被服室に入ると、俺を見るなりいきなり夢乃に、先輩おめでどうございます！ って言われた。何のこっちゃと思ったら、彼女さんできたんですね、良かったですね、とか言ってきた。

はあ？ んなバカな話があるかよ。

なんの嫌がらせだ？ 夢乃にしては悪質だなと詰め寄ってみると、何やら校内では今その話題で持ちきりらしい。

おい、本人が知らねーぞ。本人置いてきぼりってなんだよ。

しかも、そんなに話題になった原因は、そーとー頭にくるもんだった。今回の彼女騒動、……俺から告白したってことになってるら

しい。

おいおい、誰だよ、3年の美人な女って？ そんな奴どこにいないだよ？ 知らねー奴にどうやって告るんだっつもの！ ずいぶんややこしいこと言ってくれるじゃねーか。

確かに、俺のこと追い回してる奴が、勝手に俺の彼女だってデマを流すことは今までもあった。でも、俺から告白したって話は今までなかったんだ。

たく。マジで勘弁してくれよ。

で、俺の好み？ 美人な奴？ 確かに美人は好きだよ。だけど、好みをなんで他人に決められなきゃいけない？

だいたい1番頭にくんのは夢乃だ。

おめでどうか言ってるきやがって、なんでこんな話信じてんだよ！ マジでイライラする。

あいつは俺が女に追い回されて困ってるの知ってんだろ？ 目の前で、俺の彼女だってウソついた奴を見てんだろ？

なんで俺の潔白を信じない？

なんで噂を噂だと思わない？

納得いかない。ムカつく。

そう思ったら、夢乃を見る目がいつもよりきつくなった。目線の先の夢乃がビクッとして、目をうるませはじめる。

たくっ、こいつは。

「なに泣いてんの？」

「な、泣いてませんけど」

「じゃ、泣きそう？」

「そ、そんなことはないです」

「じゃー、さ。俺に彼女ができたって聞いて、悲しくて泣きたくなっちゃった？」

ちよっとニヤニヤしながら聞いてみた。

「な、泣きたくなんて、なりませんよ」

「ほおー」

やっぱムカつく。
なんかムカつく。

ムカつくついでに盛大に夢乃をにらんでやった。

「っ！」

「は？ なにびくついてんの？」

「せ、先輩が今にらんできたからちよっとビククリして……」

「ビクリねえ……」

「……」

「ねー、夢乃って俺んこと怖いの？」

「こ……」

そう言って固まってしまった。たく、あきらかに怖がってんじやん。

「なんか傷ついたし、マジで。夢乃って、そーゆー奴だったんだな」

「えっ！」

そう言うと、夢乃の顔がいかにも傷ついたって感じになった。たく、傷ついたのはこっちだよ。

「傷ついたって顔してるけど、傷ついたのはこっちだよ」

そう言ってやると、夢乃はますます傷ついたって顔になった。だから、傷ついたのはこっちなんだよ！

「もーいい」

そう言って、俺はいつも座ってる夢乃の前の席から立ち上がった。たくっ、なんだってんだよ！

やってらんねー。

俺はそのまま被服室を出て行こうとした。

「怖くないです！」

いきなり夢乃が後ろから叫んだ。

こんなに大きな声はじめて聞いた。

「ゆ…」

「先輩のこと、怖くないです！」

振り向くと、そう言いながらぼろぼろ涙を流している夢乃がいた。

「ゆめ」

「先輩って、いつもイジワルだけど、イジワルなこと、されて困るけど……、こ、こわいって、おもったことは……」

夢乃の目からぼろぼろ涙が流れ続ける。

「ゆめの」

「せ、せんぱい……ごめんなさい……。きずつけようと、した、わけじゃ」

言葉がどんどん小さくなる。

それでも俺から視線を離そうとしない。

両目からどんどん涙がぼろぼろこぼれ出す。

「ごめんなさい、わたし……ごめんなさい」

「夢乃……」

ああ、俺なにやってんだろ。

こんな顔させたかったわけじゃないのに。

こんなこと言わせたかったわけじゃないのに。

「ごめんなさ……い、せんぱ……」

「もういい！ ごめん夢乃！」

夢乃のそばに駆け寄ると、夢乃を抱きしめた。

「夢乃ごめん！ 夢乃ごめん！ 夢乃ごめん！」

そう言って夢乃をぎゅっと抱きしめた。

俺、最低だ。

こんなに泣かせて。

俺の頭をなでただけで、傷つきました？ なんて気にするような、ちよっとぶっとびすぎてるぐらい優しい夢乃。バカだよ夢乃、頭な

でられたくらいで俺が傷つくはずなのに。

むしろ逆だよ、嬉しかったんだ。

なのに夢乃のやつ、ごめんなさいって頭をぺこって下げたんだ。
そんな優しい彼女を、俺は自分の都合で傷つけてしまった。

俺んこと怖いだって？

当たり前だ。さっきはわざとにらんで、わざと怖がらせたんだ俺が。

俺は最低な態度をとって部屋を出て行こうとしたのに。
それなのに、あんなに必死に俺のこと怖くないって言うてくれた。

先輩ごめんなさいって
傷つけたって。

夢乃、本当にごめん。

俺イライラしてたんだ。
変な噂されて。

最近ずっと楽しかったんだ。

夢乃と過ごす時間が俺には癒しかったんだ。

夢乃は俺にとって、特別だったんだ。

なのに、そんな夢乃から、よりもよって1番聞きたくない話を聞いてしまって、言葉を聞いてしまって、俺はちょっと悲しかった。

先輩、おめでとうございます、なんて。

彼女さんできたんですよね、良かったですね、なんて。

ぜったい夢乃から聞きたくない言葉だった。

でも、俺ももっとちゃんと話せばよかったな。

噂なんでデマだよって。

ついでに、そんなこと言われると悲しいとか、言ってみればよかったな。

感情的になっちゃって。夢乃にあたって、本当にバカだ。

怒る相手は夢乃じゃないのに。

噂を流した奴が悪いのに。

たかが、校内の噂話を夢乃が話したただけなのに、あんなに怒って。

「夢乃、ごめんな」

「せ……、んぱい。ごめ……なさい」

「夢乃、もうあやまんないで」

「せん……ぱい」

「夢乃……」

俺は、夢乃が泣き止むまでずっと夢乃を抱きしめ続けた。

〈先輩魔王様の変身〉

あなた誰ですか？

あついや。

そんなこと言っちゃいけないことくらいわかってるんです。

でも、どうしたのでしょうか？

いったい何が起こったのでしょうか？

えーと、あなたはいったい誰ですか？

あ、いや……。

これを聞くのは果たしてアリなのでしょうか？

ここは、聞かない方がいいのかな？ スルーするのがいいのかな
……。

ちょっとレベルが高すぎて私の情報処理が間に合いません。

「そんなわけなんですけど、どーゆーことなんでしょうか」

「は？ なにいきなり。どうした夢乃？」

は……、うっかり考えてた事の続きを質問してしまいました。私

は何を言ってるんだろう。

「すみません、いろいろ混乱してます。てか混乱しました実になんとも」

「はは、なにそれ」

そう言って、いつもの先輩の定位置こと、私の目の前にいる方は爽やかに笑いました。ええ、実に爽やかに！ 本当に爽やかに！ わー、……どうしよう。なんだろう。やっぱりもう耐えられそうにないので言います。私は言います。

「あなた誰ですか？」

「え！ ゆ、夢乃……ひどいよ！」

えーん、えーん。夢乃がいじめるより！ と、お嘆きになってるのは私の知ってる先輩？

さっき、ガラガラッ！ っと、凄く勢いよくドアが開いたと思ったら、大きな声で「夢乃！ こんにちはー！」とこちらの方が入ってきて、私の目の前にドスンと座りました。

そんなことするのは私の知ってる先輩、だと思うのですが。

でも、やはりにわかに信じられないです。

「あなたはだあれ？」

「夢乃」。そろそろ現実をうけとめて。こっちの世界へ帰ってきて」

さつきからうわの空すぎるよ。帰っておいで。俺を見て。
と、何やら騒いでいる、のは先輩？

「はい、さすがに私もとうとう認めそうです。目の前にいる人が先輩だってことを」

「よかったあ。安心した」

ふー。と胸に手を当てて安堵のため息をついてる、目の前にいる人。

やたらイケメンで、身長が高く、カッコイイ声のお人。そこまでは私の知ってる先輩情報と合致するのですが。どうも様子が違うので頭がまだ受け付けない……。

だって、髪が……。長めでキレイな黒だったのに、茶色になって、しかも長さも短くなってる。それに、先輩っぽい知的キラリメガネがない！ 白衣も着てない！

「やっぱり誰ですか……。私の知ってる先輩じゃないです……」

「ゆ、夢乃」

先輩っぽい人は、ちょっとあせってるようです。しばらくオロオロした後、よし！ と、気を取り直したような素振りをしました。

「ごめん、驚かせて！ で、でも、できればこの姿、慣れてほしいんだけどなあ」

両手を合わせて私をちょっと上目遣いで見ながら、おそろおそろな感じにそう言われました。

なんか私の知ってる先輩情報と1番違うところを発見してしまいました。

性格が全然違う。雰囲気、なんか違う……。

「誰……」

「まだ言うか！」

「だ、だって、先輩じゃないみたいですよ？」

「じゃー。夢乃的には先輩みたいな感じって、どんな感じなの？」

「え、そうですね」

んー。

「メガネ、黒髪、白衣、イジワル、ニヤニヤ、魔王様？」

「ん。確かに。俺が知ってる俺像ともよく合いますそれ」

「ですよー」

ははは、とお互い笑いあって、和やかなムードに……って、違う！

「ごっ、ごめんなさい！ 失礼なこと言って！ 双子さんとかですか？ よく似ていらっしゃる身内の方とか？」

「夢乃ちゃん。一緒にカラオケ行ったよね？」

熱く熱唱し合ったじゃないか。と、恨めしく言われてしまった。確かに先輩によく似ている身内の方ではなく、先輩とカラオケに行きました私。

「それにほら」

そう言って携帯電話を持ち上げました。それは先輩の携帯ですか？　といえば、先輩の携帯って見たことなかったかも。それよりなんか見たことある物がついてる。

「あ、私と先輩で作ったストラップ」

「そうそう、これこれ」

これ見ればわかるでしょ？　と、ストラップを指差しながら先輩っぽい人はニッコリ笑いました。

わ、わぁ。私は幻を見ているのでしょうか。まるでそれは天使のような笑顔です。

「って、天使？」

「え？」

「だって、キレイすぎます、その笑顔」

「え、そ、そんな」

照れるなあ……、とうつむき加減で照れてる先輩がいます。先輩が照れてる？

「私は天にめされているのでしょうか。目の前にこんなにキレイでカッコイイ天使がいて……シカモテレテル」

ココハ、テンゴクデスカ？　と思わずロボット口調で話してしまいますと、目の前にいる天使さまが焦りはじめました。

「ゆ、夢乃、落ち着いて！　パニックにならない！　ほら、深呼吸して。ヒーヒーフー」

ガダッ！　とイスから立ち上がって私の方まで身を乗り出してきた天使さまがそんなことを言いました。本当に心配してますって感じの雰囲気です。

てか、ヒーヒーフー、って？

「あの、それは出産時の呼吸法……」

「え！　そうだったけ」

ごめんごめん、間違えた！　とあたふたしてる先輩。本当にあせってるみたい。でも顔つきは真剣。言ってることはよくわからないけど、なにか一生懸命な感じが伝わってくる。

「ぷっ！　ふふふ」

「え？」

「ははは、先輩ったら、はははは！ ヒーヒーフーとか言っちゃって！ 面白すぎる、ははは」

「ゆ、夢乃……、は、ははは。なにやってんだろな俺。はは」

ははは、ふふふと2人で笑い合った。本当、なにやってんだろ私達。

「ごめん、俺、余裕なくてさ。夢乃、嫌な思いした？」

「え！ ぜんぜんそんなことないですよ？」

「そっか。よかった」

そう言って、また天使の笑顔で私に微笑んだ。

「とりあえず座ってください先輩。お話聞きます。てか、まさに詳細キボンヌってやつでしようか？」

「はは、夢乃、無理にそういう言葉使うなよな」

古いし、そんな言葉使つてるとさらすぞー、とか笑いながら、先輩はイスに座った。

「さて、どこから話したもんかなあ」

頬杖をついてこちらを見てくる。その姿は前の先輩と一緒になのに、もうまったくの別人みたい。

「まずは。メガネだな！ メガネにしよう」

「先輩、メガネどうしたんですか？　壊れちゃったんですか？　コ
ンタクトにしたとか？」

「実は、アレ、ダテだったんです」

「ええ？」

こ、これは、とっても予想外です。予想外なうえに。

「ちょっと、これは衝撃的な事実ですね……」

「確かに。メガネは俺の一部です、って感じだったもんなあ」

でも、本当は目はいいんだ。と自分の目を指差す先輩。

「友達がさ。メガネした方が目立たないんじゃない？　って言った
から、それ以来つけてたんだけど。知的だー、クールだー、って言
われちゃって。あまり意味なかったみたい」

そう言ってちょっと苦笑い。

「確かに、メガネの先輩って知的なカッコイイ感じでしたよ。あ！
もちろんメガネなくてもカッコイイですけど」

「ありがとう」

ニツコリ微笑む先輩。

そっか。ダテだったんだ。メガネの先輩もかっこよかったけど、
今の先輩は前より明るい雰囲気で、また違った感じでかっこいい。

「白衣はね、実験中に汚しちゃって洗濯中」

「そうだったんですか」

「あとね。髪の色？」

「それも気になってました」

「実は。こう言うと、ちょっと衝撃的に聞こえるかもだけど。実は、ウィッグだったんだよね黒の。ひらたく言うとカツラ？」

へっ！　　かつ、カツラ！

「これ。今のが地毛。元々の髪の色はこんな感じ」

そう言って、ちょっと自分の髪をひっぱる。

ね、衝撃的でしょう？　　って笑ってる。た、確かに……。

でも、先輩、地毛が茶色だったんだ。

「夢乃もちょっと茶色な髪だよね」

「はい。我が家では、母親に似て2番目のお兄と私は茶色っぽいんです」

「そーなんだ。うちは妹は黒いんだけどね。んで、黒くしてたのはメガネと同で、黒髪の方が目立たないって言われてさ」

「確かに茶色髪は目立ちますよね」

「そうそう。俺、身長も高めだし、ちょっと目立ちやすくて……」

そう言って頭をちよつとぼりぼりする。

先輩っていろいろ考えていろんなことしてたんだな。

「目立つという意味では、先輩っていろいろ大変な苦勞をしてそうです」

「え……そう。かな。……。うん。ま……そうかも」

「この前みたいなのもありますし」

「あのさ、ゆめ……」

「あの！ 先輩この前は本当に」

「あー！ 夢乃！ ストップ！ ストップだよ！ あーのこと
はもういいから！ 絶対いいから！ 忘れて！」

「でも、申し訳ないことを」

「あー、あやまらないで！ ね！ 俺が悪かったんだから！」

ねっ？ ねっ？ と念を押されてしまった。

絶対だよ！ 絶対だよ夢乃ー！ とか先輩が言ってるような気がする……。

でも、そんな先輩の声は入ってこなく、私はこの前のことを考えてた。

この前のことは、1週間前、先輩に彼女ができたという噂話を、私が先輩に伝えてしまつて、先輩を傷つけてしまったこと。事実と違う噂をされたら、誰だつて嫌だと思う。それなのに、私はよく確かめようもしないで、まるで事実のようにその話をしてしまった。そして、先輩をひどく傷つけてしまった。

彼女さんができておめでとうございます！　とまで言つてしまつた。

私は、先輩と出会うきっかけになつた、先輩のことを追い回してた女の先輩の一件で、先輩が自分の気持ちとは離れたところで恋愛話が進んだり、嘘を話す人をすつごく嫌がつてるの知つてたのに。

私つて本当にデリカシーがないというか……最低だ。あの時の先輩すつごい怒つてた。そして、凄く傷ついてたんだと思う。

いっぱい傷つけちゃつた。

あんなに怒らせちゃつた。

傷つけたかったわけじゃなかったのに。

悲しい、辛い思いをさせてしまった。

しかも私つたら、自分が悪いのにおもいきり泣いちゃつて。

先輩は泣かしてごめんっていっぱいあやまってくれて。私が悪いのに。ずっと泣き止むまで、側にいてくれた。

あの日から1週間。
ずっと気にしてた。

もう先輩は私に会いにくることはないと思ってた。まだ、凄く凄く怒ってて、絶対嫌われちゃったなって思ってた。だけど先輩はまた会いに来てくれた。

でも実際現れた先輩がすごく予想外な雰囲気だったから、ちょっとビクリしちゃって、普通におしゃべりしちゃったけど……、大丈夫だったかな。

なんか考えてたら怖くなってきた。どうしよう、どうしよう、どうしよう。

「どうしよう……」

あ、また思ってた事が口から。

「夢乃！ 夢乃！」

「あえ！ わわっ、あゝわ」

突然自分の上半身が大きくゆすられた。

「夢乃ー！」

「ひええ、しえ、しえんぱ」

どうも先輩が私の肩に手をのせて大きく前後に揺すってるみたい。でもこれちょっとキツイ！

「たすけ」

「は！ ヤベっ。って、おい夢乃大丈夫か！ しっかりしろ！」

1度揺するのをやめてくれた先輩は、ぐったりした私にビックリしたのか、また揺すりはじめた。ヤメテー。

「はゝひゝ」

「は！ ヤベ、夢乃っ？」

「しえんぱい……」

すっかり目が回ってしまった。ふあゝ。

「ご、ごめん。大丈夫？ 大丈夫なの？」

やりすぎた。やべー嫌われる……。とか言ってる。
顔色が心なしに青い気がする。

「先輩、大丈夫ですよ。……それに、大丈夫です」

「え」

私は、先輩の目をしっかり見ながら言った。

「私、先輩を嫌いになったりしません」

この気持ちだけはちゃんと伝えなければ。
私は先輩を嫌いになったりしませんよ。

「でも、先輩が私を嫌いになることはあるかもですけど……」

こればかりはしょうがない。えへへ。

「ない！　ないよ！　夢乃を嫌いになんてなったりしない！　絶対に！」

ガバっ！

そう言う先輩はいきなり私を強く抱きしめた。

「ふえ！　せ、先輩っ」

「夢乃、この前はごめん！　でも、あれは、そう！　お互い忘れよう、そうしよう」

「忘れる？」

「そうそう！　転んだ。そう、石につまずいてちょっと転んだ程度の出来事ってことでどうだろう？」

「転んだ」

「そうそう！　ね、お願い！　忘れて」

これ以上、傷つかないで……。と、最後の方はささやくように言った。

そして私を抱く力がちよつと強くなった。

「先輩、もう大丈夫なんですか？」

「え？」

「傷ついてないですか？」

「ない！ 傷ついてないよ」

「もう、怒ってないんですか？」

「うん、もちろん」

「もう、悲しんでないですか……」

「うん。悲しんでないよ。でも、夢乃が悲しんだと辛いな。夢乃が辛いと俺も辛いんだ」

なー夢乃。仲直りしよう。

先輩は優しくそうつぶやいた。

ああ、嬉しい。

仲直り、していいの？

怒ってないの？

私のこと、嫌いになってないの？

私も先輩と仲直りしたいです。

そしたら、また前みたいにお話してもいいのかな？

私は、ちょっと肩の力が抜けた気がした。

本当は、先輩を傷つけてしまった以上に

もう先輩とこうやって一緒にいられなくなると思うことの方が辛かったから。

く村人Aまたは兵士Aの語りく前編

「おい聞け優！ 夢乃と仲直りしたんだぞ！」

「はあ？」

「だから！ 夢乃と仲直りしたんだよっ！」

やった〜！ 夢乃俺の天使！ 姫ー！ とか騒いでる。

「おい維緒、人の部屋に勝手に入ってきて騒ぐなよ、うっとおしい」

「いいだろ別に。俺は嬉しいんだよ」

むふふ〜。と言って勝手に俺のベットに乗っかって、枕元にあったウサギのぬいぐるみを抱きしめた。

「夢乃は〜、このウサちゃんより可愛いぞ〜」

「ちょ！ やめろよ！」

ぬいぐるみの口に、う〜ん……とか気持ち悪い声を出しながらキスしようとしたから急いで取り上げた。

「バカヤロウ！ 俺のウサちゃんに何すんだ！ これは俺のハニーなんだよ」

お前なんかキスさせてたまるか！

「維緒、ふざけたことすんならたたき出すぞ」

「え、ごめんなさい……。怒らないで」

両手を合わせて、上目遣いでこっちを見てくる。

「キモイ！　されっ！」

「えー。許せよう。俺とお前の仲だろ？」

「あっ！　こらっ」

「このウサは俺がいただいた！」

「このやろ！　返せ！」

ぬいぐるみを強奪されて、俺は必死になって取り替えそうとした。

返せ！　返さん！　返せー！　返さんー！　がしばらく続き。

「はぁ、はぁ……。取り返した……」

「はぁ、はぁ……。ちくしょ……」

なんとか取り返す。

「ちえっ。いいよ、じゃ俺これで」

今度はいつもウサちゃんの隣に置いてるくまちゃんをつかんだ。

「それもダメだ」

「いいだろ。とって食いやしないよ」

ヒラヒラ手を振る維緒。信用ならん。

「で、なんだよ用は」

奴からくまちゃんを無事救出しながらそう聞く。

「だから、夢乃とねー仲直りしたんだよ」

ニコニコ笑いながら話し出した。

夢乃ってのは誰だ？

いや、実際は心当たりがある。

最近、維緒の機嫌が凄く良かった。

部長のくせに、部活をサボりまくってた維緒が、ここ最近毎日部室に顔を出していた。

実際は部室にあるファミコンでレトロゲーばっかやってたんだけど。

だから、結局いてもいなくても変わらない。

後輩の世話とか、めんどくさいことは全部、副部長の俺の仕事。

まあ維緒の部長ってのはもともと名ばかりではある。

なんたって、ジャンケンで決まったんだからな。

ジャンケンならあいつに負ける気がしない。弱すぎる。

まあ、名ばかりでも、部長が毎日来ることに越したことはないわけだが。

でも、毎週水曜日だけは絶対に来なかった。

何やってんだ？　って聞いても、気持ち悪くニヤニヤ笑うだけで。

変なことしてんじゃないか？　と、ちょっと疑ったりしたけど、とりあえず機嫌がいいし、他の日はちゃんと来るし、とくに何も言わずほっとしていた。

でも、先週の火曜を最後に、突然、維緒が部室に来なくなった。

おまけに様子が変わだ。

1日中、心ここにあらずな感じで、ぼーっとしてる。授業は聞いているのかわからない。いや、きつと聞いてない。授業が終わると、いつもふらふらとどこかに行ってしまう。

いつもは好きなカルピスを1日3本以上飲んでるのに、なぜか1本も飲まなくなった。

昼休みも、ちゃんと食べてるのかどうかも、ふらふらどっかに行っちゃうからよくわからないし。とりあえず、カルピス飲まないあたりから察するに維緒の一大事っぽかった。

昨日の昼休み、維緒を追いかけた。

あいつ、足早っ！　ふらふらしてるくせに、どんどん進んで行くから、途中見失いそうになったけどなんとか奴の行き先を発見した。

維緒は人気のない校舎裏にある庭で座り込んだ。

「おい、高林維緒」

「ん？　ああ、中村さんちの優くんですか」

こっちを見上げながら、なんか用ゝつと言ってくる。

「おい、心配してわざわざ、様子を見にきてやったんだぞ。ありがたくな」

わざわざを強調した。

「はあ。どうも」

「なんだよ。おい、維緒どうした？」

「なんでもあるない」

「あるのか、ないのか？」

まあ、あるんだろうけど。

維緒の隣に俺も座った。

「ほらっ。維緒の命の水。カルピス様だぞ。コレでHPを回復しと

け」

「ありがとう村人Aよ」

そう言って、受け取りはするものの、やっぱり心ここにあらずだ。

「キモイ、お前キモイ。なんかキモイ。男前の顔が台無しだぞ」

「男に男前って言われても嬉しくない」

よく見ると目の下にはくまがくつきり。寝てないのか？

「眠れないのか？ 家にもこないし、母さんが心配してたぞ？」

「食欲も無い。眠れない」

「はあ？ 風邪か？」

「熱はあるない」

「どっちだよ」

「風邪じゃない。でも、きっと病気だよ俺」

ちょっと絶望的な顔をした。

「おい、大丈夫なのか本当に」

「大丈夫だよ」

「とりあえず無理やり食っとけ」

かにぱんを渡す。足をいっこいっこちぎって食べるのが好きなんだってさ。

「かにー様か。サンキュ」

受け取るがやっぱり心ここにあらずだ。

「自分、凄い顔してんの気づいてるか」

「知ってる。俺キモイ顔してる。ついでに中身もキモイ。最低だ」

なんだこいつ。

「確か学校では俺様キャラでいるって言ってなかったか。弱弱しいキャラに転職したの？」

「もー無理。俺は疲れた。レベル1のHPは2くらいしかないザコに戻りました。常に表示は黄色です」

「転んだだけで死にそうだ」

「はは。死んだ」

もう死んだー。とか言って頭を抱えた。おいおい。

こんな維緒を見たのは久しぶりだった。

維緒と俺は家が隣同士のいわゆる幼馴染。
最近じゃ、俺様キャラが定着した維緒だけど、前からそうじゃない。

こいつは元々はレベル1のザコキャラだ。

とにかく弱虫で、いつも周りの目を気にして生きてる。そんなやつ。

維緒は小さい時から顔の作りもいいし、髪も茶色で、とにかく目立つやつだった。

まあ。見た目はいわゆる遺伝ってやつだから仕方ないとして、問題は中身。

いつもビクビクしてて、弱虫で傷つくことを恐れてる。そんな奴。

維緒の両親は海外にすることが多くて、しょっちゅう俺んちにいた。

半分うちの家族みたいな感じで。

小学校までは俺にベツタリで、いつも俺の後に隠れてたっけな。

中学はあいつは私立に行ったから学校一緒じゃなかったけど、暇さえあれば俺の部屋で遊んでいた。

そんな関係が変わったのは、高校に入学してから。

同じ高校に入ったけど、クラスは別々になった。

小学校はずっと同じクラスだったし、中学はあいつは男子校。

それが、俺は同じクラスじゃないし、うちの高校は共学。

この初めての状況で、まあ実際何が原因だったかはわからないけど、維緒は変わった。

皆になじもうとして努力したのか、おどおどした性格を変えた。それはいい。

よくしゃべるようになり、愛想もよくなった。
そしたら、元々カッコイイやつだ。モテはじめた。

それからだ。あいつが変になっていったのは。

遊ぶ、遊ぶ。とっかえひっかえ彼女が変わる。

おい、維緒。お前はそんな奴じゃなかったはずだ。どうしたんだ
いったい？

無理してんじゃないか？

俺の心配をよそに、どんどん状況はエスカレート。見てられん。

俺の部屋にも来なくなったし、どんどん俺たちの距離は離れて
いった。

風の噂でしか維緒の状況を知る事ができなくなって、なんか少し
だけ悲しくなった。

バカだよなあいつって。

そんな感じで維緒がいない生活に慣れ始めた1年の3学期も終わりの頃。突然、維緒が俺の部屋にやってきた。

そして一言、俺は間違っていたと言った。

俺は、いろいろ聞くことはしなかった。維緒が言いたきや言えればいいし、こうやってまた家にきたけりゃくればいいし。そうして、俺と維緒はまた前のような付き合いに戻っていった。

でも、前とちょっと変わったところもある。

まず学校で維緒は性格を変えると言い出した。俺様なキツイキャラになって、女を近づけさせねーと。

はあ。こいつはバカか。うん。バカ決定。

でもバカでも幼馴染の腐れ縁。どうすれば目立たないか？ と無い頭で考え始めた維緒に、見た目で言う身長はしょうがないから頭と顔ならどうにかなんのかな……と、なんとなく言うのと、マスクとサングラスと帽子と言い出した。

お前は不審者か！ めっちゃ目立つだろ！

成績はいいくせに、なんでこういう事に関しては頭が回らない？

とりあえず、サングラスはまずいからメガネだろ。マスクはやめろ。帽子もダメ。でも髪の色でも変えてみたら？ 黒にするとか？ と提案。

そうかー！ と、目を輝かせてあっという間にどっかに行っ

まった。

次の日、髪の毛を黒くしてメガネをかけた維緒に会う。
どうよ？ と、したり顔。

かわいいそうな奴。

似合ってるけど、思いつきり目立ってるよ。

むしろ知的クールな感じで、今までと違った感じでモテそうだ。

お前は所詮何をどうしたって目立つんだよ。それから逃げるんじゃないかって、それとどう付き合っていくかを考えたらいんじゃないか？ そう言おうとしたけど。

……まあ、いっか。

なんかあいつすんごく上手くいっただと思ってるみたいだし。幼馴染のよしみで黙っというてやろう。

いつか、自分で気づく日がくるだろう。それまでは見守っててやろう。そう思った。

く村人Aまたは兵士Aの語りく後編

「で、維緒くんはやつと気がついたんだな。自分の愚かさに」

「気づいたよ。俺。恥ずかしい。穴を掘って入ろうかなって思ってた」

「そーかい、そーかい」

「シャベル持ってる？」

「持ってるわけないだろ」

そう言っって俺は空を見上げた。校舎裏には沢山の木が植えてある。木々の間から木漏れ日があふれている。目をつぶって風を感じる。冬が近づいてきたな。冷たい風だ。でもなんか気持ちいいな。

「で、維緒なにがあった？」

「なにして」

「死にそうなんだろう？ 死ぬ前に話ぐらいなら聞くぞ」

「そうだね、死んだらこうやって話せないな」

「そうだ」

「カルピスも飲めないし」

「そうだな」

「かにー様の足をちぎって食べる楽しみもなくなるな……。それに」
かにぱんを見つめながら言葉を止めた。何を考えてるんだろう。

「優。俺さ。好きな子がきたんだ」

「はあぁー？」

維緒がモテはじめてから彼女がいっぱいいたのは知ってる。その時も、イヤ、俺たちの友情が始まってから1度もこんな話したことがなかった。

「好きな子だと？」

「うん。可愛いこなんだ。ほら、これ一緒に作った」

携帯を取り出すと俺の前に持ち上げた。そういえば気になってたけど、維緒の携帯にはいつの間にか可愛いフェルトで出来た星のストラップがついていた。

俺も欲しかったから、どこでゲットしたのかって聞いたら手作りだし、絶対教えないし！ とやたら激しく言うもんだから、ちょっとムカついて無理やり取ってやろうかと思って手を伸ばしたらすぐくムキになって怒った。なぜそんなに怒るんだ？ ってその時は思ったけど。なるほどそういうことか。

「文化祭終わったあとくらいに知り合ってさ。ちょっと仲良くなつて」

ふーん。もしかして。

「水曜日だけ部活こなかったのって彼女に会ってたのか」

「え！　なんでわかったの？　うん。まあ。一方的に俺が押しかけてただけど。彼女、家庭科部なんだけどさ毎週水曜日は部活1人になっちゃうらしくて被服室に1人でいて。それで会いに行ってたんだよね」

「ほう。甲斐甲斐しい」

「そんなんじゃないんだ。むしろ嫌がられてたというか」

まー。維緒がうざったく絡んでたんだろうな。あいつ気に入ると周りが見えなくなるほど集中してそれに依存する癖がある。

「でも一緒にそんな可愛いストラップ作る仲なんだろう？　彼女も維緒に好意を持ってるんじゃないの」

「好意。……いや、むしろ嫌われてると思う」

「そんな毎週通ってたのに？　いつも彼女となにしてたんだ」

「え……。いや」

おい、目が泳いでるぞ。

「あー！ 俺はバカだ！ 彼女をいじめて喜んでいただなんてー！」
頭をかかえる維緒。

「はい？」

「彼女が困った顔すると面白くて。あと、顔を真っ赤にすると可愛
いからついついからかっちゃって。それが止まなくて。でもその
気持ちがあるのか最初わかんなくて」

おいそれ。まんま好きな子いじめちゃうってやつなんじゃ。

「初恋なんだ。俺。今まで人をちゃんと好きになったことなくって。
彼女はいたけど、あれは俺に好意を持ってくれたのが嬉しかったか
ら付き合っちゃったというか。別に相手の事が好きで付き合ってた
わけじゃなくてさ。今まで最低だったよな俺……。好きな子できて
やっと気づいた……」

「ほー。大人の階段をのぼったようだな維緒くん。それで、何にそ
んな悲観している？」

「俺、彼女を傷つけちゃったんだ。いっぱい泣かせちゃったんだ」

あーあ。バカだこいつ。

「それで、どうした？ 嫌われた？」

「きつ、嫌われた！ きつとすんごく！」

俺の人生終わったー！ と騒ぎ出す。

「それで。嫌われてから彼女のことが好きなんだって自覚したのか。不器用だな」

「うう。俺はダメな奴なんだ。最低で、ダメな」

「で、どうしたい？　ずっとこうして嘆いてるつもりか？　彼女を傷つけたんだろ？　謝ったの？」

「もう、合わせる顔がない……」

「ふーん。で、維緒はそれでいいんだ？　彼女にもう会えなくて」

「だって。きつとすごく怒ってるよ」

「じゃ、もう忘れろ。縁がなかったんだ。未練がましくそんなのつけてんなよ。その可愛いのは俺によこせ」

そう言ってストラップに手を伸ばす。

「ちょーっ、ちょっと！　ヤメロ！　汚い手で触れるな！」

「汚い手とはなんだ！　不要になった可愛いのを俺様が救ってやると言っただ、感謝しろ！」

「ダメだ、やらん！　くん、こっちくん！」

「お前……。そんなじゃ新しい恋に進めないだろ」

「はあ？　新しい恋ってなんだよ！　俺は彼女一筋だし！」

俺はストラップに伸ばした手をひっこめた。

「なんだ、わかってんじゃない」

「は？」

「維緒はそのこ一筋なんだろう？ だったらこんなところでいじけてないで会いに行けよ。会って謝れ。それで告白しろ」

「えええ？」

「しないのなら、その可愛いのは俺の物になる」

「ちよっ、ちよ、それはカンベンしてくれ！」

「なぜだ？」

「なぜじゃない！ これは俺の宝物なんだ！ 初めての共同作業だぞ！」

一生大切にするんだー！ と叫ぶ。はいはい。

「うるさいな。そんなに叫ぶんなら諦めるな。まだ気持ちとか伝えてないんだろ？ 言う前に諦めてどうする。そもそも、何があったか知らないけど？ 彼女を傷つけたって自覚があるならきちっと謝るべきだ。お前はごめんなさいも言えないのか？」

「え、………言える」

「だったら、嘆いてる前にちゃんとしろ。男としてケジメつけとけ」

「ケジメ」

「そうだよ。だいたいお前は責任って言葉を知らないのか？ 今まで言わなかったけど、最近の維緒はだいぶ無責任な行動を取ってるぞ。そんなことしていると、本当に大切なものを無くすぞ。無くしてからじゃ遅いんだ」

「無くす……」

「そうだよ。ストラップでそんな騒いでるくせに、もし彼女に彼氏ができたらどうすんだ？ 生きていけるのか？」

「彼氏っ！」

維緒が固まった。たぶんそんなこと考えたこともなかったんだろうな。面白いからもうちょっと攻撃してやろう。

「まあ、さっきから言ってる通り、そんなことになったら行き場を失うであろうその可愛いストラップは俺が貰ってやるとして」

ニヤッと笑う。

「後悔しないの？ そうなったらきつと後悔するぞ？ なぜあの時、素晴らしい親友様のお言葉をちゃんと聞かなかったのだろう。彼女に会いに行かなかったのだろう。なぜ告白しなかったのだろう！ なんて俺は愚かだったのだろう！ そう思うだろう？」

まだ固まってる。

「なんなら俺が彼女に気持ちを伝えに行くか。君が好きですって」

「はあー!?　なんで優が会いに行くんだよ!　なんで告白すんだよ!」

「お前が行かないから?　俺もストラップ欲しい」

「まあまで、早まるな!　ゆ、優の好みとは違うかもよ」

「うん、それは確かにわからないな。でも会ってみればわかるかも」

「ちょちょちょ、うん。いや違う。優の好みとはまるで違うぞ!　断じて違う!」

「そうか?　維緒って見る目ないからな。適当なこと言ってんじゃないの?」

「ひい。や、やめて優様。俺の彼女を取らないで」

「はは、ひどい顔」

「こっちは必死だ!」

はは、この辺でかんべんしてやるか。

「だったら答えは決まったな。会いに行け。それで謝って告白してスタボロになればいい!」

「おい優。さっきからひどすぎない?」

「こんくらい言わないとわかんないだろ維緒は。ほら、とりあえずかにぱん食って、聖水飲んどけ」

これからお前は戦いに行かなければ行けない。回復を怠らないことだ。

「それと、ついでだから言う。その頭とメガネ、もうやめろ。目立つことに変わりはない」

「あー。うん。実は俺もうすうす気づいてたわ」

維緒もそこまで鈍感ではないらしい。

「彼女のこと本気で好きなら、本当の姿を見てもらった方がいいんじゃない？　それで嫌がられても俺知らないけど。自業自得だし」

「はい。そうです」

「まあ、それくらいで嫌がられるんだったら、その程度だったってことで」

「そう……だな」

うん。わかったと素直にうなずいた。さて、俺にできることもこれくらいかな。

「じゃ、俺は行く」

「あ、うん。サンキュ」

立ち上がって維緒を見下ろす。

「こんな優しい親友がいて幸せ物だな」

「ほんとだ。俺にはもったいないくらいだよ。優ありがとう」

とりあえず死なない程度にがんばると維緒は言った。

たくっ。世話の焼ける幼馴染だ。

「振られてもなぐさめてやらないからな。まー頑張れ」

ニヤッと笑ってその場をあとにした。

その時見た維緒の表情は盛大にくもっていた。

その後、教室に帰ってきた維緒はさっきよりは顔色がよくなり、何かを決意したようなしっかりした表情をしていた。よし、もう大丈夫だな。

そして、今に至る。

「夢乃って噂の好きな子か。よかったじゃん仲直りできて。で、素

に戻った維緒は好評だった？」

「いや、好評かわからないけど、こっちもカッコイイとは言ってくれたよ。最初は俺だって信じてもらえなくて困った」

「はは。それはそれは」

維緒は俺が言った通り、髪の毛を地毛に戻しメガネもはずしていった。

今日の授業中はいつも通りだったから放課後戻したんだろう。

「で、振られたの？」

「はああ？　なんでそんなこと言うんだよ。ひでえ」

「告白はできたのか？」

「いや……」

まあ。仲直りできたのなら上々だな。

「ま、仲直りおめでとう。冷蔵庫にカルピスあるぞ」

「え？　マジで、もらうっ」

そう言って、勢いよく部屋を飛び出す。こんだけ元気ならもう大丈夫だろう。

しょうがないから後でかにぱんも恵んでやるか。

でも、なーんか。本当に良かったな。

幼馴染の成長を思っ、少し胸が熱くなった。

不器用な俺の幼馴染。

人付き合いが不慣れなせい、ただ頭が回らないバカなのかはわからないが、自分を魔王に仕立て上げて、恐れから自分の城を毒の沼で囲んだ。

魔王の思惑通り、大抵の奴はその毒に恐れをなし魔王に近づくことは叶わなかった。そして魔王はその地位を確立していった。

だけどな魔王様よ？

お前はどうかやってその城を出るんだ？

そのままじゃ、一生その城から出られないんだぜ？

1番その毒に侵されてるのはお前なんだよ魔王。

魔王は毒をまくことはできたが、その毒を中和する方法を知らない。したがって、魔王は決して自分の城から出ることができないんだ。

所詮、村人Aか兵士Aな俺はそんなこと魔王に伝えることはできない。

そう思ってたなら。どうやらそんなバカな魔王に一筋の光が差したようだ。

神も気まぐれなことをする。

そいつはきつと勇者だ。勇者は毒を無効化する呪文で軽々と魔王の城に乗り込んで行った。

いや？　もしかしたらさざまなトラップに翻弄されて大変な目にあったかもしれない。

それでも勇者はとうとう魔王がいる部屋にたどりついた。そして魔王を倒した。

そして、

見事に魔王を救い出したんだ。

まあ、変なシナリオだけど俺は満足だぞ、元魔王よ。

せいぜい今後は脱線しないように気をつけるんだな。

く仲直りとクリスマスく

「夢乃ー！ 会いたかったあ」

先輩が教室に入ってきたと思ったら、凄いスピードで近づいてきた。

「先輩、重いー！ やだやめてください！」

「えー。いいでしょ？ ちょっとだけ」

そう言って私を後ろからぎゅっと抱きしめる。

「夢乃だ。可愛い。俺の天使。会いたかったあ」

「せ、先輩。重い……というか、恥ずかしいのですが……」

「照れてるの？ 可愛いっ！」

後ろから、可愛い可愛いっ！ ってそんなに言われましても。

「夢乃、耳真っ赤。可愛い。りんごさんみたい」

いただきます。と、かぷっと耳をかまれた。

「きゃー！ 何してるんですか先輩！」

あまりのことに飛び上がって先輩から逃げて、耳を押さえて振り返ると手を大きく振ってる先輩がいた。

「ご、ごめん！　あまりにも美味しそうだったからつい！　って、違うんだ、誤解だ！　別にそんなことしようとしたわけじゃなくて！　てか、怒った？　怒ったよね？　ごめん夢乃ー」

泣きそうな顔で大騒ぎしてる。

「せ、先輩？　……はあ。もういいです」

もう絶対しないでくださいね？　そう、念を押すとうなずいた。うなずいたというより、頭を上下に激しく振ったような。それはさながらヘッドバンギング。悪気はないのかもしれないけど、先輩と仲直りしてから先輩の態度が明らかにおかしくなった。先輩に言わせると、前の方がおかしかったんだそうですが。ちょっと今の状態もなかなか凄いです。

それに会うたびにスキンシップがエスカレートしてる気がするのですが。

「先輩どうしちゃったんですか？　なんか本当におかしいですよ？」

そう言いながら席に座りなると、先輩もまた私のそばに寄ってきた。

今度は抱きつかれはしなかったけど、隣の席に座った。しかもかぎりなく私のそばに。というか。

「先輩、くっつきすぎではないですか？　もうちょっとそっちにいてもいいですよ？」

「え！　そ、そんなことないと思いますけど？」

まるで一緒にカラオケに行ったときみたいだなあと一瞬思ったけど、あまりにも先輩の態度が違いすぎてなんとなく同一人物と思えない。

「目が泳いでます」

「へ？ や、そんなことはない」

私から目線を外す。たぶん悪いことしてる自覚はあるのかもしれないけど……動こうとしない。うー、しょうがない。ちよっとジャマだけど先輩がくつついてる状態で作業を再開した。

「今日は何を作るのかな？」

私が何も言ってこないので安心したのか、先輩が質問してきた。

「雪だるまさんを作ろうと思ってます」

「雪だるまか。いいな。もう冬だもんな」

「先輩、ハサミとか、針を使うときは危ないですからあまり近づいてきちゃだめですよ？」

「はい」

いいお返事だ。んー、でもやっぱりなんか調子が狂うかも。

「あ、白じゃない色も使うの？」

「はい、リボンかマフラーつけようかなって。バケツとかでもいいんですけど」

「赤と緑。いつもと違うチョイスだね」

いつもはパステルカラーが多いのに、とフェルトを手にとってチエックしてる。

「今日はクリスマス使用のを作ろうと思って」

「ク、クリスマス！」

「は、はい？　そうですけど」

先輩が真面目な顔をして私を見てくる。ジーン。

しばらく2人で見つめ合ってしまった。あ、もしかして。

「先輩もクリスマス使用の欲しいですか？」

「え！」

え、いや、その。と、わたわたし始めた。なーんだそうか。

「言ってくれば作りますよ？　どんなのがいいですか？」

「え。じゃあ、うさ……」

「わかりました」

先輩ってうさちゃん好きですよね、と言うとカックンとうなずいた。

「じゃあ頑張って作ります」

「へっ！ う、うん」

ニッコリ笑ってくれた。天使の笑顔だ。

「あのさ、夢乃ってさ……」

「はい」

雪だるまさんから変更して、まずはうさちゃんを作ることにした。型を作るために、バッグからノートとシャーペンを取り出した。まだ使ってないページを開くと、うさちゃんの形を描き始める。

「えと、あの。クリスマスって……」

「クリスマスって？」

こんなもんでいいかな？

なかなか上手く描けたので、こんどは切り取るために筆箱からハサミを取り出す。

型を切ったら、フェルトにあてて型の周りをチャコペンでなぞれば下準備完了。

「あの、クリスマスよ、てい、あ、あるの？」

「……ん。え？」

型を切ろうとしていた手を止めた。

いま、クリスマスって予定あるの？ そう聞きましたか先輩？

「……えと。……クリスマスの予定ですか？ とくにはまだ。きっと家族とお祝いします」

「そっかあ」

「先輩はどうされるんですか？」

「お、俺は、よてい、ない」

「お互い今年は一人身ですね」

「そ、そうだね」

「クリスマスかあ。私、毎年ケーキを手作りしてるんですよ。今年はなんのケーキにしようかな」

「あ。の。夢乃よかったらクリスマスに」

そう言って、先輩は1度言葉を切った。

また2人で見つめ合う。

「……あのさ。もし暇なら24日クリスマスイブに付き合ってくれないかな？ かつ、買い物に！」

「か、買い物ですか」

「う、うん。さ、最近、妹にろくにプレゼント買ってなかったから、何か買ってあげようと思ってね！ いちをお兄ちゃんだしさ」

「妹さんのプレゼント選びのお手伝いですか？」

「そ、そうなのですが。どうでしょうか」

ちよつと真面目な顔でこっちを見てくる。

「はい。いいですよ、先輩」

私はすつごくニツコリと笑えたと思う。

小話くはじめてのギターく（前書き）

ちよつと小話です（^^）

く村人Aまたは兵士Aの語りくのちよつとあとのお話。

小話〜はじめてのギター〜

「うわぁ〜！　なんだこれー！」

「はぁ？」

部屋に入ってくるなり、維緒がそう叫んだ。

「なにして、ギターだけど」

「なんでなんでなんで？」

なんでギターがあんだよ！　と叫ぶ。

「うっさい。俺のだから俺の部屋にあるんだけど」

「優ギターなんて持ってなかっただろ！　買ったの？」

「え。持ってたけど俺」

「なんだってー！　聞いてないぞ！」

なーウサくん？　と勝手にベットに乗っかって、ウサギのぬいぐるみと語り合ってる。

「維緒は、知らなかったっけ？　俺、去年の文化祭で、メンバー足らないってバンド手伝わされて」

「はー！？」

口を大きく開けたまま、固まった。

「おい、あご外れそう」

「なんで？　なんで、知らないよ俺」

「まあ、あの時は維緒と連絡取れなかった時期じゃん？」

「あ……。そうか」

そう言ってベットに倒れこむ。ウサちゃん！　と叫びながらウサギのぬいぐるみをぎゅうぎゅうしてる。

「こら、俺のハニーをいじめるな」

「だって。衝撃だ。ってか、今まで見かけなかったんだけど、どうして？」

「これか？　なんかギター壊れたから貸してくれとか言われて、2月頃から貸してた」

「マジか」

「で、やっと今日返ってきたわけ。それまでは結構弾いてたんだけど」

ギタースタンドからギターを取ると適当に弾いてみた。

「むはー！　ちよつ。カツコイイじゃん」

「そうか？　なんか久しぶりだからあんまり弾けないな」

「マジで？　いや……。なんか優もいろいろしてたんだな」

「まーな」

「ずっと一緒だったから。優の知らない一面ってなんか変な感じだ」
くっくつと笑う。

「そうだな。俺だって去年の維緒のことなんも知らんぞ」

「あー。そうか」

「維緒も弾いてみるか？」

「え！　いいの！　実はちょっと真面目に教えて欲しかったりするんだけど」

「ギター興味あんの？」

「うん。夢乃がさ、ギター弾けるんだって」

「マジか。凄いじゃん」

「一緒に楽器屋行ってギターの弦買ったんだ」

「へー」

「なんか初めてギターの弦を張り替えたら、次の日もう弦が1本切れちゃったんだってさ」

「はあ？ そりゃ災難だな」

ふふふ。夢乃っておっちょこちよいで可愛いんだ〜と笑った。

「じゃ、弾いてみるよ」

維緒がギターを持つ。うん、なかなか様になるな。

「維緒ってバンドとかやったらモテそうだ」

「マジ？ じゃ、がんばっちゃおうかな〜」

そう言ってボロボロボロ〜、と適当に音を出した。

「押さえてみるよ」

適当に簡単なコードを押さえさせて、音を出させてみた。

おおお〜。と歓喜の声を出す維緒。

「俺カッコイイ！ すげー！」

「はいはい。とりあえず、どんなのが弾きたい？」

「え？ そーだな。カッコイイのがいいけど」

「カッコイイのねえ。まあ、コードからやんのがいいのかな」

「さっきのみたいなやつ？」

「ああ？ さっきのなら教えられるけど」

「なく。俺すぐ弾けるようになるかな？」

「はあ？ まだ何も弾けてないくせに」

「どれくらいなもんで弾ける？」

「人によるんじゃない？ とりあえずこれ貸してやるから、1ヶ月頑張ってみたら？ 1ヶ月続けばけっこう弾けるようになるよ」

まじく？ 1ヶ月か。俺ギター弾けるようになったちゃうわけ？
と騒いでる維緒。

なんか嬉しそうだ。

「早く夢乃と一緒に弾けるように頑張ろう」

「まー、弾けるようになったら、スタジオデートでもしたら？」

「楽器しよってデートですか？ カッコイイじゃん俺」

「とりあえず弾けるようになれ。練習あるのみ」

こいつ1ヶ月ちゃんと続けられるのかね？

「なー。今度一緒にギター見に行こうぜ。俺カッコイイのが欲しい。ギザギザなやつとか」

「だから、気が早いっての！」

小話〜はじめてのギター〜（後書き）

維緒、初めてのギターにテンションが上がるの巻。でした☆

維緒が欲しがってるギザギザなやつとはフライングVです（笑）

優くんが持つてるギターはストラト（白）な設定。

優くんがちょっと弾いてみせた曲は

脳内設定的には（笑）Sum 41のThe Hell Song
でした（＊＾＾＊）

ちなみに、夢乃ちゃんが持つてるのはギブソンタイプのギターです。

夢乃ちゃんはまだお下手なので

この曲はまだ弾けるか弾けないか微妙なところ？

単音弾きが……。

〜楽しい予定としょっぱい思い出〜

「はい。いいですよ、先輩」

夢乃が笑顔でそう言った。

はい。いいですよ、先輩。はい。いいですよ、先輩。はい。いいですよ、先輩。

うっかり脳内リフレインしちゃうよね？
だって嬉しいんだもん！

家に帰ってきた俺は、自分の部屋に入るとガッツポーズをした！

「よっしゃあー！ー！」

俺は頑張った！ よく言った！ そして勝ち取った！ 素晴らし
いクリスマスの予定を手に入れた！

「夢乃とクリスマスデートします俺っ！」

とりあえず高らかに宣言しておきましょう。

ぐふふ。と声が出てしまう。俺って本当に気持ち悪いなあ。

自分の気持ちに気づいてから本当に夢乃が愛しくなってしまった。

今までの俺ってなんだったんだろういったい。

「そだ、スケジュール帳に書きましょう、そうしましょう」

俺は机の引き出しからノートを一冊取り出した。

高校に入学してからずっとこれに予定を書き込んでる。

普通のスケジュール帳だと書き込みづらいから、自分で線をひいてカレンダーっぽくして適当に使ってる。ノートだと書き込みも楽だし便利だ。思いついたこと書いたり、日記帳の役割もはたしてる。

「夢乃とデート……。ふふ」

当日は夢乃の最寄の駅で待ち合わせすることになった。

24日のここに待ち合わせ時間と場所を消えないように油性マーカーで書いていく。

「……」

ちょっと考えてからハートマークも付け足した。

「よし！」

もう決定だ。

そういえば？ と去年の12月のページをめくってみる。
去年ってどうしてたっけな……。

「あ」

ノートをバサッ！　と閉じて頭を抱えベツトにダイブ。俺のバカ！　バカ！　バカ！

「せっかく忘れてたのに……。なんで見てしまった俺」

かつての彼女と待ち合わせ場所が書いてあった。

それは忘れたい記憶だった。

「なんでプレゼントないの！」

「だって、お前いらないうって言ったじゃん」

「ええー？　それ本気にしたの！」

信じられない！　サプライズとかしてよ！　サプライズ！　とか言いながら目の前の彼女は凄く凶悪な顔をしている。

「もー、いいよ。じゃ、なんか買って？　今日、今から」

「はあ？」

「アクセとか見に行っていない？」

そうだ、あそこに私の好きな洋服ブランド入ってるんだ。行こうよ、と手をひばってくる。

「別に見るのはいいけど」

「じゃあ決定ね！ ふふっ」

そう言っ目目の前のビルを目指して歩き出す。さっきは凶悪な顔してたけど、今は機嫌も戻ったみたいで嬉しそうだ。まあ、機嫌よくなってくれんならいいか。機嫌悪いとめんどくさいし。

「ねー維緒。みてみて」

「なに」

「ねー。ふふっ。みんなこっち見てる」

そう言っ腕を組みながら体を寄せてきた彼女が周りをチラッと見た。

「そーか？」

「ふふふ」

やたら機嫌よく笑ってる。まあ、嬉しそうだしいいか。

その後、やたら沢山服とかを買わされた。まあ、機嫌がいいからいいけど？ でもクリスマスってんでどこも混んでるし、ずっと荷物持たされて、ねえねえ、これ可愛い？ とつぎつぎに服やらアク

セサリーやらバッグを見せられるのは正直疲れた。てか、よくわかんないけど何で聞くの？ 本人が気に入ったならいいんじゃないの？ とりあえず無反応だと怒るから、適当なこと言いながら愛想笑いしといた。

「本当に混んでてやんなる……」

買い物が終わると、さっきまで機嫌がよかったはずの彼女がどこも混んでると不機嫌になった。

「じゃー、帰ろう？ 今日はどこも混んでるって」

「ええ？ なに言ってるの？ クリスマスなのに？ これからじやん」

そう言って俺を見上げながら抗議の声を上げる。

「だって、やなんだろ？ こんなに荷物もあるし」

「やだよ！ 維緒ともっと一緒にいる！」

せっかくのクリスマスなのに！ もっとラブラブしようよ！ と俺にいきなり抱きついてきた。

「おい、こんなところでやめろよ！」

「いいでしょ」

騒いでいたら周りの人達の視線がこちらに集まってきた。

「だから、やめろって」

彼女を無理やり引き剥がす。

「ヒドイ維緒！ 彼女になにすんの！」

はあ？

なんかみんな同じこと言うよな。

俺が付き合う彼女はみんなどうしてか外でイチャイチャしたがる。
それを拒むとなぜか猛烈に怒られる。

「別に、みんなの前ですることないだろ」

「私はみんなの前でもしたいのっ！」

なんでわからないのー！ と怒り出した。

「……俺はやだ」

「はー。維緒って本当、カッコイイのになんか残念なんだよな」

はあ？ なんだよそれ。

「まーいっか。ねー維緒」

いきなり猫なで声で見上げてきた。

「維緒へのクリスマスプレゼントなんだけど……」

そう言いながら俺をひっぱって耳元でこう言った。

「私をアゲル」

「……」

おい。

俺にさんざんプレゼント買わせといて、お前も結局プレゼントないじゃん！

そうして、俺のあまり楽しくもない、どちらかというと疲れただけのクリスマスは過ぎていった。

その彼女とは年明けに性格の不一致で別れた。

「なんか最低だった。俺っていったいなにしてたんだろう……」

思い出したら本当に悲しくなった。

「夢乃」

机に置いておいたケータイをつかむとストラップを眺めた。

これは初めて会った日に、夢乃と俺で作ったストラップだ。

あの日記念にってもらったんだけど、それから気に入ってずっと着けてる。

今じゃすっかり俺の宝物だ。

思えば携帯にストラップ着けたのって初めてかも。

「夢乃に会いたいなあ」

もうすぐ冬休みだ。

今までは冬休みって嬉しかったけど、今年は休みになっちゃうと夢乃に会えないからちよっと悲しかった。でも、幸運にもクリスマスデートが出来ることになったじゃないか！

「うん！ 落ち込むな。テンション上げていけ俺！」

えいえいおー！ っとガッツポーズをする。

右手には携帯を持ちながら。

「あ……」

そういえば俺、まだ夢乃の携帯番号もメールアドレスも知らない……。

「他人の空似？」

「ああ！　またやっちゃったよ」

「ふえ？」

「夢乃ごめん、忘れ物した。取ってきていいかな？」

「いいよ。じゃあ、私ちよつと自販機のところ寄っていい？」

「うん。急いで取ってくるから」

「ゆっくりでいいから、転ばないでね」

「ほいっす」

そう言っ、真奈美っちはくるつと後ろを向いて、急がなくていいって言ったのに全速力で走り出してポニーテールとスカートをひらひらさせながらあつという間に階段を駆け上がっていった。彼女はわりとしっかり者さんタイプなのに、なぜか部活帰りに忘れ物することが多い。

私は、そこからすぐ近くにある自販機に向かった。そいえば小銭あつたかな？

お財布を覗きながら、歩いていくと自販機に先客さまがいたようで、自販機からペットボトルを取り出すところの方へ歩いてきた。

「たく、あいつ……マジでムカツク」

なにやら悪態をつきながら歩いてくるカルピスのペットボトルを持ってる人。その人を見て、一瞬固まってしまった。

え？ あれ。

チャリン。

その人がまさに私の隣を通りすぎようとした瞬間、お金が落ちた音がした。下を向くと百円玉が落ちてる。

「あ、ヤバ」

「あ！ 大丈夫ですか？」

私がかがんで百円玉を拾った。

「はい、どうぞ」

「ごめん。ありがとう」

そう言って受け取った人。

身長が高くて、メガネで、白衣で、黒髪な人。

「……」

「……何か？」

「へっあ、なんでもないです」

し、失礼します！　とあわててその場を離れる。

ちよつとの間見つめてしまった。

だって。ちよつと前までの先輩にその人は雰囲気こそっくりだったんだもん。

身長は、もしかしたら先輩よりちよつとだけ高いかもしれない。それに、先輩よりちよつとほっそりしてるかも。それと目元が違った。先輩はどちらかというとパツチリな目だけど、さっきの人は細くてつり目な感じ。でも、キツイ印象は受けない。前までの先輩の雰囲気はちよつと優しくした感じ。

自販機の前に着くと、後ろから声が聞こえてきた。そつとそつちを見ると、さっきの人が誰かと話をしていた。

お前もボンバーマンで負けたのか？　いや、俺はマリオっす、とかなんとか言ってる。

話が終わったのか、その人はいなくなってしまったけど、後から来て話してた人がこっちに歩いて来た。

「あれゝ。立花じゃん？　ういっす、お久しぶりだねー」

「あー、まっちーじゃん。久しぶり！」

彼は中学が一緒だった町田俊太くんだった。

「クラス違うからほとんど会わないな」

「そうだね。本当に久しぶり！　元気だった？　てか、白衣着てる！」

「そーだよ。俺、科学部なんだぜっ。似合ってるだろん」

「あれ？　中学の時は卓球部だったよね。でも、白衣なかなか似合ってるよ」

「あんがちょ」

そう言って、自販機にお金を入れ始めた。

「立花は家庭科部だっけか」

「そうだよ。今も家庭科部だよ」

「そっか。高校生活エンジョイしてるかい？」

「してるよ」

そんな会話をしていると、まっちーがボタンを押して、落ちてきたペットボトルを取り出した。

「カルピス？　そだ、さっきまっちーが話してた人って科学部の人？」

「あ、そうだよ。われらが科学部の1番偉い人だぜ。副部長だけど」

「へえー」

あの人が前に先輩が言ってたしっかりしてるって噂の副部長さんだったんだ。

「ねえねえ。科学部でカルピス流行ってるの？ 副部長さんもカルピス持ってたよ」

「あー。それは企業秘密ですの言えせんねえ」

「企業秘密？ 実験に使うとか？」

「んー。立花が科学部入ってくれるんなら教えるけど。まあ、入ったら強制的に理由がわかる」

「ほお？」

「じゃあ俺、ちんたらしていると怒られるかもだから行くね。もっと話してたいけど。また皆で遊ぼーな。連絡くれよ」

「うん遊ぼうね」

「じゃーな」

そう言ってちょっと早足でまっちは去っていった。
久しぶりだったから、私ももうちょっと話したかったなあ。

そだ、まっちに聞けばよかった。

科学部で、部長のものまねはやってるの？ って。

先輩に似ていた人が、中村優さんって人で、先輩と幼馴染で親友だったと知るのはもう少し先のお話。

そして、優先輩が先輩にそっくりだったんじゃないくて、先輩が優先輩のマネをしていたと知るのは、それよりもうちよつと先の話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4437y/>

先輩といたいけな後輩

2011年11月18日04時52分発行